

12

調査特別委員会の開催状況

7 調査特別委員会の開催状況

(1) 冬季五輪招致・スポーツ振興調査特別委員会（24期、2015年度～2018年度）

年度	開催日	開催状況
平成 27 年度 (2015 年 度)	7月17日	副委員長の互選／理事制の設置について／運営方針について
	9月18日	冬季オリンピック・パラリンピック招致に係る報告について ○冬季オリンピック・パラリンピック招致の経過 ○冬季オリンピック・パラリンピック招致に関する想定スケジュール ○冬季オリンピック・パラリンピック開催調査業務報告書抜粋 ○冬季オリンピック・パラリンピック開催概要計画検討委員会について ○大会コンセプトに関する主な意見
	11月4日	参考人の出席要請について
	11月5日	施設の調査 ○札幌市大倉山ジャンプ競技場 ○真駒内セキスイハイムアイスアリーナ
	12月7日	参考人からの意見聴取 ○早稲田大学スポーツ科学学術院 教授 原田 宗彦氏
	12月10日	委員派遣について
	12月18日	冬季オリンピック・パラリンピック招致に係る報告について ○冬季オリンピック・パラリンピック開催概要計画策定ロードマップ ○大会コンセプト案 概要版 ○冬季オリンピック・パラリンピック開催概要計画大会コンセプト案 ○冬季オリンピック・パラリンピック施設配置計画に係る候補地検討案
	1月20日 ～22日	行政視察 ○冬季オリンピック・パラリンピック開催に伴う施設整備について（長野市） ○冬季オリンピック・パラリンピック開催後の施設利用について（長野市） ○第2次「スポ柳都にいがた」プランについて（新潟市） ○新潟市アイスアリーナについて（新潟市）
平成 28 年度 (2016 年 度)	5月11日	冬季オリンピック・パラリンピック招致に係る報告について ○冬季オリンピック・パラリンピック招致に関する想定スケジュール ○オリンピック・パラリンピック開催概要計画（案）概要版 ○開催概要計画書（案）本書

	6月3日	参考人の出席要請について
	6月20日	参考人からの意見聴取 ○日本パラリンピアンズ協会 理事 永瀬 充 氏 ○パラノルディックスキーチーム日本代表 監督 荒井 秀樹 氏 参考人の出席要請について
	8月1日	参考人からの意見聴取 ○スキージャンプ選手 株式会社土屋ホーム 葛西 紀明 氏 ○株式会社土屋ホーム副会長 スキー部総監督 川本 謙 氏
	9月21日	委員派遣について
	10月6日	冬季オリンピック・パラリンピック招致に係る報告について ○冬季オリンピック・パラリンピック招致に関する想定スケジュール ○オリンピック・パラリンピック開催概要計画（案）概要版 ○開催概要計画書（案）本書
	11月8日 ～10日	行政視察 ○味の素ナショナルトレーニングセンターについて（日本オリンピック委員会） ○2020年東京オリンピック・パラリンピックについて（東京都） ○東京都議会オリンピック・パラリンピック等推進対策特別委員会について（東京都） ○横浜市スポーツ推進計画について（横浜市） ○障害者スポーツ文化センター横浜ラポールについて（横浜市）
平成29年度 (2017年度)	6月13日	副委員長の互選 冬季オリンピック・パラリンピック招致に係る報告について ○冬季オリンピック・パラリンピック招致に係る経過・取組 ○冬季オリンピック・パラリンピック招致想定スケジュール 委員派遣について
	8月7日 ～9日	行政視察 ○京都スタジアム（仮称）整備構想について（京都府） ○障害者スポーツ振興アクションプランについて（京都府） ○長岡市スポーツ推進計画について（長岡市） ○アオーレ長岡について（長岡市）

	8月30日	施設の調査 ○市立みなみの杜高等支援学校
	12月8日	冬季オリンピック・パラリンピック招致に係る報告について ○2026年オリンピック・パラリンピック冬季競技大会開催都市決定までの想定スケジュール ○開催経費削減に向けた国への要望事項及び対話ステージでの交渉項目について ○対話ステージ用資料（概要版）について
	3月27日	冬季オリンピック・パラリンピック招致に係る報告について ○2026年オリンピック・パラリンピック冬季競技大会開催都市決定までの想定スケジュール ○平昌オリンピック・パラリンピック視察の概要 ○New Norm（新しい規範）概要 ○開催概要計画見直しの方向性
平成30年度 (2018年度)	6月4日	委員派遣について
	8月1日	冬季オリンピック・パラリンピック招致に係る報告について ○冬季オリンピック・パラリンピック招致の現状について ○対話ステージを受けた今後の主な課題と役割分担 ○2026年オリンピック・パラリンピック冬季競技大会開催都市決定までの想定スケジュール
	8月6日 ～8日	行政視察 ○かわさきパラムーブメントについて（川崎市） ○カルッツかわさきについて（川崎市） ○大規模国際大会等の誘致について（北九州市） ○ミクニワールドスタジアム北九州について（北九州市）
	10月17日	冬季オリンピック・パラリンピック招致に係る報告について ○冬季オリンピック・パラリンピック 北海道・札幌招致について ○I O C 声明文公表までの経緯及び2030年に向けた今後の課題 ○2030年オリンピック・パラリンピック冬季競技大会開催都市決定までの想定スケジュール

(2) 冬季オリンピック・パラリンピック招致調査特別委員会（25期、2019年度～2022年度）

年度	開催日	概要
平成 31 年度 令和元年度 (2019 年 度)	7月5日	副委員長の互選／理事制の設置について／運営方針について
	7月29日	冬季オリンピック・パラリンピック招致に係る報告について ○冬季オリンピック・パラリンピック 北海道・札幌招致について ○2030年オリンピック・パラリンピック冬季競技大会招致に向けた開催概要計画の見直し状況 ○2030年オリンピック・パラリンピック冬季競技大会招致に向けた開催概要計画の見直し状況
	9月18日	施設の調査 ○札幌市宮の森ジャンプ競技場 ○札幌市大倉山ジャンプ競技場 ○さっぽろばんけいスキー場
	11月29日	冬季オリンピック・パラリンピック招致に係る報告について ○招致プロセスの見直しと今後のスケジュール ○冬季オリンピック・パラリンピック招致に係る市民対話事業の振り返りと今後の方向性 ○会場配置計画の主な検討状況 委員派遣について
	1月22日 ～24日	行政視察 ○日本ガイシスポーツプラザ（アイスリンク）について（名古屋市） ○第20回アジア競技大会（2026/愛知・名古屋）に係る選手村等の整備・後利用について（名古屋市） ○味の素ナショナルトレーニングセンターについて（日本オリンピック委員会） ○ナショナルトレーニングセンター屋内トレーニングセンター・イーストについて（日本スポーツ振興センター） ○日本財団パラアリーナについて（日本財団）
令和3年度 (2021年 度)	7月8日	副委員長の互選
	11月29日	冬季オリンピック・パラリンピック招致に係る報告について ○大会概要（案）について ○市民対話の概要及び意向調査について
	1月31日	参考人の出席要請について
	2月16日	参考人からの意見聴取

		<p>○パラノルディックスキー日本チーム ゼネラルマネージャー 荒井 秀樹 氏</p> <p>○日本女子カーリング選手 女子カーリングチームフォルティウス 近江谷 杏菜 氏</p> <p>冬季オリンピック・パラリンピック招致に係る報告について</p> <p>○冬季オリンピック・パラリンピック招致に係る意向調査と機運醸成・市民対話事業について</p> <p>○大会がもたらすもの</p>
令和4年度 (2022年度)	6月6日	<p>陳情の審査</p> <p>○陳情第141号「2030年札幌市冬季オリンピック・パラリンピック招致活動を止めることを求める陳情」の初審査</p> <p>冬季オリンピック・パラリンピック招致に係る報告について</p> <p>○冬季オリンピック・パラリンピック招致に係る意向調査結果の報告と今後の取組について</p>
	11月8日	<p>冬季オリンピック・パラリンピック招致に係る報告について</p> <p>○冬季オリンピック・パラリンピック招致に係る報告について</p> <p>○北海道・札幌 2030 オリンピック・パラリンピック冬季競技大会概要(案)更新版</p>
	12月12日	<p>請願の審査</p> <p>○請願第2号「冬季五輪招致に関する札幌市民の意思を確認するための住民投票の実施を求める請願」の初審査</p>
	3月9日	<p>陳情の審査</p> <p>○陳情第152号「2030年札幌冬季五輪招致に関する賛否を確認するため、10歳以上を投票資格者とした住民投票の実施を求める陳情」の初審査</p>

(3) 冬季オリンピック・パラリンピック調査特別委員会（26期、2023年度）

年度	開催日	概要
令和5年度 (2023年度)	5月29日	副委員長の互選／理事制の設置について／運営方針について 冬季オリンピック・パラリンピック招致に係るこれまでの活動状況及び 大会運営に係る見直し検討状況について ○2030 オリンピック・パラリンピック冬季競技大会の招致活動 ○北海道・札幌 2030 オリンピック・パラリンピック冬季競技大会概要 (案)【更新版】 ○大会運営に係る見直し検討について
	7月7日	冬季オリンピック・パラリンピックに向けた大会運営見直し案の検討状 況及び今後の市民対話事業について ○第2回検討委員会及び大会運営見直し案中間報告の概要について ○今後の市民理解促進及び市民対話事業について
	10月30日	冬季オリンピック・パラリンピックに係る今後の招致活動について ○今後の招致活動について ○市民対話事業及び大会運営見直し案について
	2月29日	冬季オリンピック・パラリンピックに係る招致活動の総括について ○招致活動停止までの経緯 ○招致活動の総括・検証 ○招致活動を踏まえた今後の取組

13

調査特別委員会資料

平成27年(2015年)9月18日
冬季五輪招致・スポーツ振興
調査特別委員会(第2回)
時刻)午後3時
場所)第一特別委員会会議室

本日の案件

- 1 冬季オリンピック・パラリンピック招致に係る報告について

作成部課	観光文化局スポーツ部
作成年月日	平成27年9月18日
提出理由	冬季五輪招致・スポーツ振興調査特別委員会における「冬季オリンピック・パラリンピック招致に係る報告について」の説明資料として

冬季五輪招致・スポーツ振興調査特別委員会 資料

(平成27年9月18日)

【報告事項】

冬季オリンピック・パラリンピック招致に係る報告について

(基本理念・大会コンセプトについて)

- 資料1 冬季オリンピック・パラリンピック招致の経過
- 資料2 冬季オリンピック・パラリンピック招致に関する想定スケジュール
- 資料3 冬季オリンピック・パラリンピック開催調査業務報告書抜粋
- 資料4 冬季オリンピック・パラリンピック開催概要計画検討委員会について
- 資料5 大会コンセプトに関する主な意見

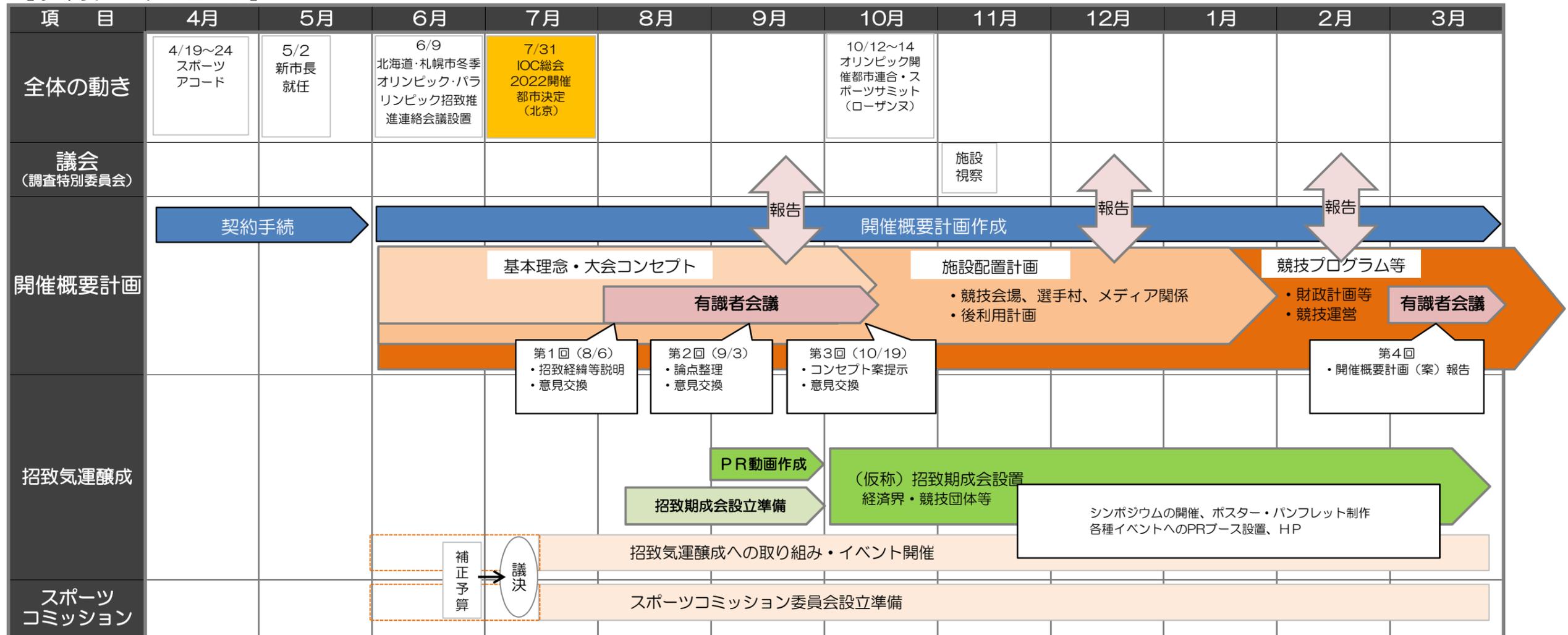
- 参考1 第1回冬季オリンピック・パラリンピック開催概要計画検討委員会議事録
- 参考2 第2回冬季オリンピック・パラリンピック開催概要計画検討委員会議事録

冬季オリンピック・パラリンピック招致の経過

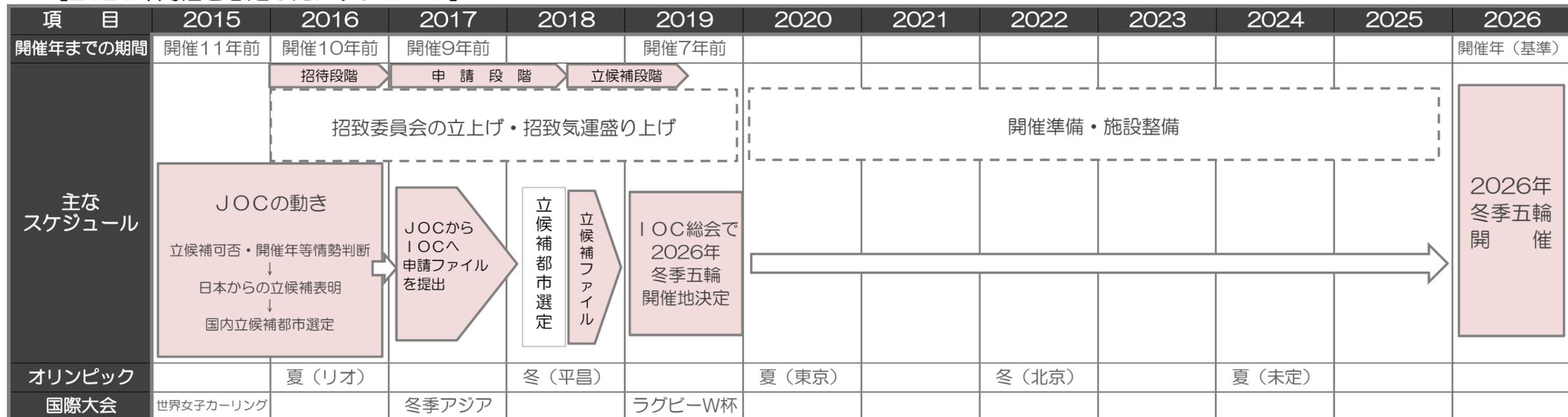
日 付	内 容
H25.9.7	2020年夏季オリンピックの開催都市が東京に決定
H25.9.25	平成25年3定 ・上田市長が冬季オリンピック・パラリンピック招致検討を表明
H26.2	上田市長がソチオリンピックを視察
H26.4～	冬季オリンピック・パラリンピック開催調査業務を委託（～8/29）
H26.10.1	広報さっぽろ10月号での開催調査の結果報告
H26.10.1～	市民意見の把握 ・1万人市民アンケート 10/6～10/20 ・市民意見募集 10/1～10/20
H26.10.2	オスロ（ノルウェー）が2022年大会の撤退
H26.10.6	冬季オリンピック・パラリンピック招致を考えるシンポジウム開催 ・札幌商工会議所アンケート結果：招致すべきとの意見79.7%
H26.11.6	札幌市議会「2026年冬季オリンピックの札幌招致に関する決議」
H26.11.12	札幌商工会議所から「冬季オリンピック・パラリンピックの札幌招致に関する要望書」が提出
H26.11.17	1万人市民アンケート・市民意見募集の公表 ・1万人市民アンケート結果：66.7%が賛成 ・市民意見募集結果：58.6%が賛成
H26.11.27	平成26年4定 ・2026年冬季オリンピック・パラリンピック招致を表明
H26.12.25	JOCに対し招致意思表明書を提出
H27.4.1	観光文化局スポーツ部に招致推進担当部設置

冬季オリンピック・パラリンピック招致に関する想定スケジュール

【今年度のスケジュール】



【2026年開催を想定したスケジュール】



冬季オリンピック・パラリンピック開催調査業務報告書抜粋

1. 既存施設の適合結果

(1) 札幌市内及び北海道内スキー場

競技種目	オリンピックで求められる基準	
スキー (アルペン)	滑降	標高差:(男子)800m~1,100m(女子)500m~800m
	スーパーG	標高差:(男子)400m~650m(女子)400m~600m ②最大旗門数(それぞれに方向転換を有する):標高差の10%
	大回転	標高差:(男子)250m~450m(女子)250m~400m ②旗門数:標高差の11~15%
	回転	①標高差:(男子)180m~220m(女子)140m~220m ②旗門数(方向転換数):標高差の30~35%
	複合(滑降+回転)	滑降・回転種目と同じコース
フリースタイル	モーグル	①コース幅:最小18m ②コース全長:235m±35m ③コース角度:28°±4°
	エアリアル	①アプローチ(助走):角度約25° 距離64m以上 ②テーブル:幅約24m 奥行20m以上 ③ランディングバーン:角度約37° 距離25m以上
	ハーフパイプ	①全長:120m~160m ②平均斜度:12~16° ③コース幅:15~20m ④壁の高さ:3.0~5.7m
	スキークロス	①傾斜:12~22°(平均15°) ②コース幅:最小30m ③トラック幅:5m以上推奨 ④スタートから最初のターンまで:60m以内 ⑤最初のターンの弧:100°以上
	スロープスタイル	①標高差:100m以上200m以内 ②コース全長:約1,000m ③コース幅:30m以上 ④勾配平均12°
スノーボード	パラレル大回転	①標高差:120m~200m ②幅:40m以上 ③全長:400m~700m ④旗門数:18旗門以上(FIS推奨旗門数:25) ⑤旗門間隔:20m~27m
	ハーフパイプ	①全長:120~150m(FIS推奨130m) ②幅:15~19m(FIS推奨16.5m) ③傾斜角:15~18°(FIS推奨16.5°) ④壁の高さ:5.0m~5.8m
	スノーボードクロス	①標高差:130m~250m ②全長:650m~1,200m(40秒~90秒) ③幅:40m以上 ④斜度:平均12°
	スロープスタイル	①標高差:100m~200m ②幅:30m以上 ③傾斜角:約12°
	パラレル回転	①標高差:80m~200m ②幅:30m以上 ③全長:250m~450m ④旗門数:18旗門以上(FIS推奨旗門数:25) ⑤旗門間隔:10~14m(ターニングポール間)

スキー場	スタート標高/ゴール標高	標高	最大斜度	スキー(アルペン)					フリースタイル				スノーボード						
				滑降	スーパーG	大回転	回転	複合	モーグル	エアリアル	ハーフパイプ	スキークロス	スロープスタイル	パラレル大回転	ハーフパイプ	スノーボードクロス	スロープスタイル	パラレル大回転	
市	サッポロテイネ	985 m / 340 m	1,023m	38度	×	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		645m	手稲山																
		480 m / 220 m	482m	33度	×	×	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		260m	-																
内	札幌藻岩山スキー場	440 m / 180 m	531m	38度	×	×	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		260m	藻岩山																
道	札幌国際スキー場	1,080 m / 625 m	1,281m	30度	×	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		455m	朝里岳																
内	ニセコグランヒラフ	1,180 m / 295 m	1,308m	40度	○	○	○	○	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
		885m	ニセコアンスプリ																
内	富良野スキー場	1,060 m / 240 m	1,331m	34度	○	○	○	○	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
		820m	富良野西岳																

※スタート標高は最も高いリフト降り場、ゴール標高は最も低いリフト乗り場の標高を基本的に測定 凡例○:実施可能(コース造成等要検討) ×:実施不可

(2) 氷上施設

競技種目	オリンピックで求められる施設基準		
	敷地面積(m ²)	建築面積(m ²)	観客席(席)
スピードスケート	60,000	27,500	6,000
フィギュアスケート	兼用可能 40,000	11,000	12,000
ショートトラック			12,000
アイスホッケー1(男子)	48,000	15,000	10,000
アイスホッケー2(女子)	40,000	11,000	6,000
カーリング	48,000	7,100	3,000

競技場	既存施設				スピードスケート	フィギュアスケート	ショートトラック	アイスホッケー1(男子)	アイスホッケー2(女子)	カーリング	備考
	敷地面積(m ²)	建築面積(m ²)	延床面積(m ²)	観客席(席)							
真駒内公園 屋外	約46,000	—	7,536	固定 17,324	×	-	-	-	-	-	-
真駒内公園 屋内	約50,000	10,134	21,973	固定 6,024 移動 約4,000 立見 約1,500	-	×	×	×	○	○	諸室等要整備
月寒 体育館	48,166 ※	7,089	9,678	固定 2,321 立見 1,052	-	×	×	×	×	×	-
美香保 体育館	10,330	5,223	6,267	固定 1,264 立見 700	-	×	×	×	×	×	-

※月寒体育館の敷地面積には、ラグビー場やテニスコート等の敷地を含む。 凡例○:適合(観客席・諸室等要整備) ×:不適合

※上記基準のほか、放送、セキュリティ、医療等諸室の規定あり。

(3)屋外施設

競技種目	オリンピックで求められる施設基準	観客席
ジャンプ (ノーマルヒル)	①ヒルサイズ:100m以上	固定 3,000 立見
ジャンプ (ラージヒル)	①ヒルサイズ:110m以上	10,000~ 15,000
クロスカントリー	①コースの1/3は標高差10m以上、 傾斜9%~18%等の登り部分 ②コースの1/3は短い登り下りを含む 小さな起伏 ③コースの1/3は変化に富んだ下り部分	固定 3,000 立見 10,000
ノルディック 複合	スキージャンプ、クロスカントリー に基づく	-
バイアスロン	①競技場:選手生活エリアより 30km以内or 30分以内②標高差: 選手生活エリアの±300m以下	固定 5,000~ 7,000 立見 10,000~ 15,000
ボブスレー	トラック長:1,200~1,650m 等	固定 1,000 立見 10,000
スケルトン	トラック長:1,200~1,650m 等	
リュージュ	トラック長:1,000m以上(男子1人) 800m以上(女子1人・2人) 等	

2. 選手村規模等要件

条 件	収容人数	4,500人
	住居1人当たり居住面積 (共用面積割合含む)	約20㎡
	容積率	200%
	建ぺい率	60%
延べ 床面積	住居面積 (3階建て高さ10m)	90,000㎡
	レストラン等付帯設備に必要な面積	18,000㎡
敷地面積	住居・レストラン、トレーニング施設等 に必要な用地面積	約70,000㎡
	駐車場、バス停、道路等	約35,000㎡

競技場	概要	観客席 (席)	ジャンプ		クロス カント リー	ノル ディック 複合	バイア スロン	ボブ スレー	スケル トン	リュージュ	備考
			ノーマ ルヒル	ラージヒ ル							
宮の森 ジャンプ	ヒルサイズ: 100m (K点:90m)	固定席なし	○	-	-	○	-	-	-	-	要改修
大倉山 ジャンプ	ヒルサイズ: 134m (K点:120m)	固定席なし	-	○	-	○	-	-	-	-	要改修
白旗山	FIS公認 コース	固定席なし	-	-	○	○	-	-	-	-	-
西岡 バイアス ロン	コース全長: 4km、射場: 24レーン	固定席なし	-	-	-	-	○	-	-	-	要コース 拡幅
藤野 リュージュ	全長: 1,000m(現 在は500m のみ使用)	-	-	-	-	-	-	×	×	×	-

凡例○:適合(諸室等要整備) ×:不適合

3. 札幌大会開催経費

	総経費(億円)	札幌市負担(億円)
競技施設建設費	995	254
選手村・メディアセンター等建設費	1,139	232
大会運営費	1,861	194
招致経費	50	35
開催費合計	4,045	715

【競技施設建設費】

- ・開閉会式場は札幌ドームを想定。
- ・月寒体育館、美香保体育館、星置スケート場、藤野リュージュ競技場、真駒内公園屋内・屋外競技場は建て替えを想定しているが、建て替え場所は特定せずに試算を行った。
- ・施設の規模はオリンピックで求められる基準や過去大会を参考
- ・単価は、長野大会の建設費などを参考
- ・仮設整備費は、大会運営費に計上

【選手村建設費】【メディア村建設費】【メディアセンター建設費】

- ・場所は特定せずに試算を行った。
- ・施設の規模はオリンピックで求められる基準や過去大会を参考
- ・単価は、類似施設の建設費などを参考
- ・用地費は、札幌市の準工業地平均地価を採用
- ・仮設整備費は、大会運営費に計上

【大会運営費】

- ・過去4大会(長野~バンクーバー)の運営費平均額を参考に試算。

【招致経費】

- ・長野オリンピックと2020東京オリンピックの招致経費の平均額を参考に試算

冬季オリンピック・パラリンピック開催概要計画検討委員会について

1 趣旨

札幌市では、平成26年11月に、2026年冬季オリンピック・パラリンピックについて招致表明をいたしました。これを受け、平成27年度は開催の基本理念、施設配置計画、競技プログラム、財政計画等をまとめた開催概要計画を策定する予定です。

開催の基本理念となる大会コンセプトづくりにあたっては、行政内部の検討だけではなく、専門的視点からの意見や市民からの意見を反映するため、学識経験者や経済界、スポーツ界等からなる冬季オリンピック・パラリンピック開催概要計画検討委員会を設置いたします。

大会コンセプトは、この検討委員会で出された意見を踏まえ、年度末までに開催概要計画としてまとめる予定です。

2 任期

平成 27 年 7 月～平成 28 年 3 月

3 委員一覧

(敬称略)

役職	氏名	所属
委員長	原田 宗彦	早稲田大学スポーツ科学学術院 教授
副委員長	小林 英嗣	北海道大学 名誉教授 (一社) 都市・地域共創研究所 代表理事
委員 (五十音順)	浅香 博文	(一社) 札幌市障がい者スポーツ協会会長
	石橋 達勇	北海学園大学工学部建築学科 教授
	石水 創	石屋製菓株式会社 代表取締役社長
	小笠原 歩	カーリング選手(北海道銀行フォルティウス)
	加森 公人	加森観光株式会社 代表取締役社長
	川本 謙	株式会社土屋ホーム 取締役副会長
	久保 恒造	車いす陸上選手(日立ソリューションズ)
	志済 聡子	日本アイ・ビー・エム株式会社 執行役員 インダストリー営業統括 公共営業本部長
	霜觸 寛	(一財) 札幌市体育協会 会長
	豊島 亮	公募委員
	中田 美知子	前 FM北海道(AIR-G´)アナウンサー 常務取締役 札幌大学 客員教授
	原田 雅彦	元スキージャンプ選手、雪印メグミルクスキー部監督
	穂積 雅子	元スピードスケート選手
	三谷 まゆみ	公募委員
山本 理人	北海道教育大学岩見沢校芸術・スポーツ文化学科 教授	

＜冬季オリンピック・パラリンピック開催概要計画検討委員会経過＞
 第1回検討委員会（8月6日）開催 「どんなオリンピック・パラリンピックにしたいのか」、「オリンピック・パラリンピックを通じて何を遺したいのか」について意見交換
 第2回検討委員会（9月3日）開催 4つのカテゴリーごとに論点を整理し意見交換

(1) 「つながる」

過去と未来
1972年冬季オリンピックから繋いできた歴史を未来へ。次世代の子どもたちへ夢と希望をつなぐ

都市と自然
高度な都市機能と豊かな自然の調和したまち「サッポロ」で環境と人にやさしいオリンピック

オリンピックとパラリンピック
差別のない、すべてのひとにやさしいまちへ

札幌と世界
ウィンタースポーツ先進都市としてプレゼンスを高め、世界平和に貢献。官民あげたオール北海道体制で大会をサポート

スポーツと文化・教育
オリンピック・パラリンピックを通じ、グローバルな人材を世界に

第2回検討委員会での主な意見

- ・若者のオリンピック離れがあるのではないかと。世代間のつながりである「世代間交流」も必要。
- ・過去の大会実績から得た競技運営のノウハウは札幌が誇る財産であり、アピールすべき。
- ・「環境と人にやさしい」を強く打ち出すべき。
- ・知的障がい者のオリンピックであるスペシャルオリンピックも併せて誘致するのがいいのではないかと。
- ・東アジアにおけるウィンタースポーツの拠点ということを強調すべき。
- ・企業活動の中で、スポーツを支える地域社会貢献の文化を醸成すべき。
- ・オリンピック・パラリンピックの開催により芸術、音楽等、他の文化とつながるきっかけになると良い。

(2) 「独創性」

持続可能なオリンピックモデルを

- ・財政負担の軽減
- ・広域、分散開催、仮設の活用
- ・有効な後利用
- ・民間資本活用
- ・既存施設の活用とリニューアル
- ・環境負荷の低減
- ・北海道の豊かな食を活かす

アスリートファーストの視点で

- ・マニュアル化した大会運営からの脱却
- ・アスリートがベストな結果が出せる環境の整備
- ・選手の意見が反映した大会
- ・新たな競技種目の提案

第2回検討委員会での主な意見

- ・分散開催もあるが「コンパクト」も重要。
- ・分散開催は地方の再生に寄与するかどうか、という視点で考えるべき。
- ・「アスリートファースト」の観点から選手の移動の負担を考慮すべき。
- ・大会終了後に施設を撤去するのではなく、夏は他競技で利用する等、競技施設の有効活用を図るべき。
- ・マニュアル化したオリンピックから原点に戻り、「市民参加の手作り」で考えるべき。
- ・ホームステイの活用により、世代間交流、文化交流が出来るのではないかと。

【論点】
札幌らしさ、独創性をどう打ち出すか。

(3) 「レガシー」 注) オリンピックがもたらす有形無形の財産

オリンピックの有形無形の財産を未来へ

- ・競技施設のリニューアル
- ・オリンピック・パラリンピック開催都市としての誇りと愛着
- ・子ども達や若者に夢と希望を
- ・日常生活の延長線上にオリンピック・パラリンピックを

ウィンタースポーツ先進都市「さっぽろ」

- ・アジアにおけるウィンタースポーツの拠点としてのブランド確立
- ・ナショナルトレーニングセンターとしての機能、競技施設の充実、アスリート育成
- ・国際競技大会の継続的な開催
- ・ウィンタースポーツのライフスタイルとしての定着
- ・誰もがスポーツに親しむ健康都市の実現
- ・障がい者スポーツの振興

第2回検討委員会での主な意見

- ・市民に早くから参画していただき、手作り感のあるオリンピックがいいのではないかと。自分たちのまちをより良くするような人づくりに繋がってほしい。
- ・ウィンタースポーツが日常生活に溢れている新しいライフスタイルの創造、発信出来るとう良い。
- ・ウィンタースポーツはお金がかかるが、それ以上の魅力があり、その魅力を啓蒙していくことが必要。
- ・学校でのスキー、スケート授業を進めていくためには、指導者の育成が必要。

【論点】
①若い世代のウィンタースポーツ実施率はどうすれば向上するか。
②アスリートをどう育成するか。

(4) 「まちづくり」

札幌を新たなステージへ

- ・住み続けたいと思えるまちへ
- ・競技施設、社会基盤、民間施設等、官民一体となった都市のリニューアル
- ・高齢化社会に対応した積雪寒冷地におけるバリアフリーの実現（施設・交通網）
- ・エネルギーを有効活用したスマートシティの実現
- ・新しい都市づくりのモデルに
- ・北海道の活性化、地方創生の起爆剤に

第2回検討委員会での主な意見

- ・札幌は創建以来、先駆的なまちづくりを続けてきた結果、今の生活と経済を支える基盤が整った。
- ・より人間的なライフスタイルの創出や、真駒内のレガシーに更に磨きをかけることが必要。
- ・選手村等での先駆的な環境モデルを実現していくべき。
- ・低炭素型エネルギーマネジメント、スマートシティ、バス等の交通網の整理、こうしたものを総合して札幌で開催するオリンピックの新しい価値を訴求していくべき。
- ・パラリンピック開催を踏まえ、ITテクノロジーを活かしたユニバーサル化を進めるべき。
- ・オリンピックを契機に千歳まで新幹線を延長させ、空港と直結させてはどうか。
- ・市民に納得してもらえらるハード整備もしっかりやっていくべきではないかと。

【論点】
①72年との違いは何か。
②オリンピックを通じて、人の生活はどう変わるか。
③まちづくり長期ビジョンとどう結びつけるか。

第1回冬季オリンピック・パラリンピック開催概要計画検討委員会 議事録

日時：平成27年8月6日(木)10:30～

場所：STV北2条ビル地下1階AB会議室

出席者：

○委員(五十音順)

浅香 博文 委員	(一社)札幌市障がい者スポーツ協会会長
石橋 達勇 委員	北海学園大学工学部建築学科 教授
石水 創 委員	石屋製菓株式会社 代表取締役社長
小笠原 歩 委員	カーリング選手(北海道銀行フォルティウス)
加森 公人 委員	加森観光株式会社 代表取締役社長
川本 謙 委員	株式会社土屋ホーム 取締役副会長
久保 恒造 委員	車いす陸上選手(日立ソリューションズ)
小林 英嗣 委員	北海道大学 名誉教授
	(一社)都市・地域共創研究所 代表理事
霜觸 寛 委員	(一財)札幌市体育協会 会長
豊島 亮 委員	公募委員
中田 美知子 委員	前 FM 北海道(AIR-G´)アナウンサー 常務取締役
原田 雅彦 委員	元スキージャンプ選手、雪印メグミルクスキー部監督
原田 宗彦 委員	早稲田大学スポーツ科学学術院 教授
穂積 雅子 委員	元スピードスケート選手
三谷 まゆみ 委員	公募委員
山本 理人 委員	北海道教育大学岩見沢校芸術・スポーツ文化学科 教授
(欠席)	
志済 聡子 委員	日本アイ・ビー・エム株式会社 執行役員 インダストリー営業統括 公共営業本部長

○事務局職員

石川 敏也	(札幌市観光文化局スポーツ担当局長)
西田 健一	(札幌市観光文化局スポーツ部長)
梅田 岳	(札幌市観光文化局スポーツ部 招致推進担当部長)
久米田 真人	(札幌市観光文化局スポーツ部企画事業課 計画担当課長)

次第:

- 1 開会
- 2 秋元市長挨拶
- 3 議事
 - (1) 委員長選出
 - (2) 資料説明
 - (3) 意見交換
- 4 閉会

〈配布資料〉

- 資料 1 冬季オリンピック・パラリンピック開催概要計画検討委員会設置要綱
- 資料 2 冬季オリンピック・パラリンピック開催概要計画検討委員会委員一覧
- 資料 3 冬季オリンピック・パラリンピック招致の経過
- 資料 4 冬季オリンピック・パラリンピック招致に関する想定スケジュール
- 資料 5 冬季オリンピック・パラリンピック開催調査業務(平成 26 年度実施)抜粋
- 資料 6 Agenda2020 について
- 資料 7 冬季オリンピック・パラリンピックの招致に向けたコンセプトイメージ

- 参考 1 夏季冬季オリンピック・パラリンピック大会概要
- 参考 2 オリンピック・パラリンピック招致 開催決定各都市の勝因分析
- 参考 3 2022 冬季オリパラ招致 IOC 評価報告書概要

	あるわけではないが、ぜひとも皆様方の知見を拝借し、よりよい開催概要計画の策定ができることを心からお願い申し上げ冒頭のご挨拶とさせていただきます。
3 議事	(1) 委員長選出
事務局	<p>続いて委員の皆様をご紹介します。</p> <p>五十順に、お名前と現在のご所属を読み上げさせていただきます。</p> <p>(委員を資料 2「冬季オリンピック・パラリンピック開催概要計画検討委員会委員一覧」に沿って紹介)</p> <p>それでは、本委員会の委員長と副委員長選任を行いたい。</p> <p>資料 1 の本検討委員会設置要綱の第 2 条第 3 項の規定に、委員の互選により委員長及び副委員長を置くこととしている。</p> <p>どなたかご推薦のある方は、挙手の上ご発言をお願いします。</p>
山本委員	委員長にはスポーツマネジメントがご専門で、過去のオリンピック・パラリンピック招致にもご尽力された早稲田大学教授の原田宗彦委員が、また、副委員長には札幌の都市計画に長く携わってこられた北海道大学名誉教授の小林英嗣委員が適任と考える。
事務局	ただ今、山本委員から委員長に原田宗彦委員、そして副委員長に小林英嗣委員のご推薦があったが、皆様いかがか。
各委員	異議なし。
事務局	<p>それでは原田委員に委員長、小林委員に副委員長をお引き受けいただきたい。</p> <p>原田委員、小林委員におかれては、委員長、副委員長席にお移りいただきたい。</p> <p>(両委員が委員長・副委員長席に移動)</p>
事務局	それでは、代表して原田委員長から皆様にご挨拶をお願いしたい。
原田委員長	<p>私は 2008 年の大阪オリンピック・パラリンピック招致、2016 年の東京オリンピック・パラリンピック招致の前段階の仕事に携わり、日本オリンピック委員会の竹田会長といろいろな会議で一緒した。そういう経験もあるのでお役立てればよいと思う。</p> <p>2018 年は平昌、2022 年は北京と冬季オリンピック・パラリンピック開催が決まり、アジアで 3 回目となかなか厳しい戦いが予想される。私は 2008 年に北京と</p>

	<p>戦って強敵だったことを覚えているが、視点を変えると、今回北京と戦う必要がないこと、反対に北京の協力を得られる立場にあると思う。</p> <p>もう一点、平昌、北京と冬の大会が続くので、アジアのスノーリゾート的な立ち位置が非常に強調されてくる。スキーマーも増えるので、インバウンド観光にもプラスの影響となる、すなわち、北海道・札幌のスノーリゾートのグランドデザインをつくる上で、非常にいい流れが来ているのではないかと考えている。そのように楽観的にとらえている。</p> <p>さらに札幌市では、スポーツコミッションを設置されるということで、長い期間のスポーツイベント招致などにもプラスになると思う。恐らくスポーツコミッションとオリンピック・パラリンピック招致と一緒に語られる活動は初めてかと思う。</p> <p>そういう意味でこの招致は非常に北海道、そして札幌のまちづくりのグランドデザインをつくる上で非常に厚みのある計画になるのではないかと期待している。</p> <p>短い期間だが、委員の皆様の協力を得て、素晴らしい開催概要計画をつくれればと願っているので、ご協力よろしくお願ひしたい。</p> <p>(市長、公務の都合により退席)</p>
(2) 資料説明	
原田委員長	<p>それでは、資料説明に移りたい。</p>
事務局	<p>事務局からこれまでの招致の経過や今年度の開催概要計画策定スケジュール、本委員会でのコンセプトづくりのイメージなどの説明をお願いする。</p> <p>(事務局から資料 3～7 に沿って説明)</p>
(3) 意見交換	
原田委員長	<p>それでは意見交換に移りたいと思う。</p> <p>本委員会では開催の基本理念となる大会コンセプトについて、最終的に皆さんの意見をまとめることになるが、今回は第 1 回であるため、ご出席の委員全員から札幌市で再びオリンピック・パラリンピックを開催する場合、「どんなオリンピック・パラリンピックにするべきか」「オリンピック・パラリンピックを通じて何を遺すべきか」ご意見を伺いたいと思うので、ご自由にご発言いただきたい。</p> <p>なお事務局は、委員のご発言のキーワードとなる部分を書き出し、ホワイトボードに掲出をしてください。このキーワードがコンセプト作りのベースとなる。</p> <p>では席順に進めたいと思う。浅香委員からお願いする。</p>
浅香委員	<p>札幌でオリンピック・パラリンピックを開催する場合の私の理想は、できうる限りオリンピックとパラリンピックが融合した大会、できうる限りの範囲は大変難しい</p>

	<p>定義になると思うが、究極は同時開催と考える。</p> <p>スポンサーの確保、日程の長さ、競技会場・選手村、ボランティアの獲得、パラリンピックの注目度低下の懸念など、課題があることは聞いている。しかしパラリンピックはオリンピックに対し全く遜色ない競技大会となっている。</p> <p>パラリンピックの参加国は、オリンピックの約半数の 40 数か国で、選手・役員数は約 4 分の 1、選手数は 500 人程度となっている。</p> <p>オリンピック参加国約 90 か国の中にはパラリンピックへの出場意向をもっている選手も多いと考えられる。特に大陸別ではアジア・アフリカ・中南米からは 10 か国程度の参加しかない。</p> <p>オリンピックとパラリンピックを一緒に開催することを理念として、競技会場と都市基盤の一層のユニバーサル化、大会後の恒常的な発展途上国への支援を大きなコンセプトとすることによって、国連の唱える三つの差別「人種」「性」「障がい」の全てを解決した大会になるのではないかと考える。</p> <p>それが札幌で開催するオリンピック・パラリンピックの役割となるのではないかと考える。</p> <p>石橋委員 専門としている医療・福祉の建築の立場からお話したい。</p> <p>民俗学者の柳田國男氏の提唱された、儀礼・祭り・年中行事などの非日常を表す「ハレ」と日常を表す「ケ」という概念をご存知と思う。</p> <p>この考えをスポーツに当てはめると、オリンピック・パラリンピックは祭典としての「ハレ」の場面となる。一方で「ケ」の場面は日常生活において国民であり札幌市民がスポーツに取り組んだり、楽しんだり、親しむという場面ではなかろうかと考える。</p> <p>日常は「ハレ」の場面と「ケ」の場面が折り重なって継続している。これと同じように日常生活においてもスポーツに取り組む、楽しむ、親しむ延長線上にオリンピック・パラリンピックが存在すべきではないかと考える。</p> <p>オリンピック・パラリンピックの開催には高負担を伴うため国民・札幌市民の理解を得ることが重要。理解を得るプロセスにおいて、日常生活、日常スポーツの延長線上にオリンピック・パラリンピックを位置づけた上での準備が必要。</p> <p>札幌市民、特に高齢者や障がい者の日常生活、日常スポーツ環境の質的向上が重要。札幌市でも様々な取り組みが進められているが、例えば国の交通バリアフリー法におけるノンステップバスの整備についての基本方針(平成 22 年末までに総車両数の 30%、平成 32 年度末までに 70%)に対し札幌市はどういう状況か点検する必要がある。また、日常のスポーツを行う体育館の整備についても、利用者の 3 分の 1 が高齢者、3~5%が障がい者の利用と推計している。利用者の特性に見合った整備がなされているかチェックが必要。</p>
--	--

<p>石水委員</p>	<p>ノンステップバスは開催会場と市内を結ぶ交通手段として、体育館はオリンピック・パラリンピック出場者の日頃のトレーニングの場として利用できる。</p> <p>最終的に少しでも多くの札幌市民が日常生活、スポーツ環境の質的向上を実感し、この姿を世界、日本に発信していくことが重要。</p> <p>私は 1972 年開催時には生まれていないため、札幌オリンピックと言われても今一つピンとこない。私は長野世代となる。一方で娘は長野オリンピックを知らない。やはりオリンピック・パラリンピックは生で見て体感すべきもの。</p> <p>アルペンスキー競技を行っていた東洋大学在学中、長野出身のアルペンスキーやジャンプの選手から長野オリンピックの素晴らしさを聞き、かつて札幌で開催されたのにと悔しい思いをした記憶がある。</p> <p>石屋製菓も札幌オリンピックをきっかけに伸びていった。地下鉄、真駒内競技場など、観光インフラも含めてインフラが整ったことが大きい。グルノーブル冬季大会記録映画(「白い恋人たち」)をきっかけに白い恋人、地下鉄南北線にちなんでシェルターというお菓子もできた。</p> <p>一企業でも札幌オリンピックとの結びつきが多くあり、観光でもオリンピックをきっかけに伸びていったと聞いている。オリンピック・パラリンピックが、札幌・北海道が伸びていくきっかけになればよいと考えている。</p>
<p>小笠原委員</p>	<p>現役選手として、選手目線から発言したい。</p> <p>カーリングは長野オリンピック・パラリンピックから加えられた競技だが、新たに増えていく競技にも対応しなければならない。各競技の拠点が全国に散らばっており、ウインタースポーツの拠点が札幌市・北海道に欲しい。夏の競技は2020年オリンピック・パラリンピック開催の東京で盛り上げ、冬の競技は招致をきっかけに札幌が選手強化の拠点となればよいと思う。</p> <p>オリンピック・パラリンピックの開催前に盛り上がるのは大事だが、開催後も観光で、プライベートでもう一度来たいと思えるような大会にしたい。競技施設も、オリンピック・パラリンピック開催後に国際的な競技大会が継続して開催されるような都市になれば、市民にも愛着を持って応援してもらえるのではないかな。母親、一市民として、子育て世代、高齢者からも気持ちよく迎えられる大会となるようお願いしたい。</p>
<p>加森委員</p>	<p>加森観光は 1972 年札幌オリンピックの競技会場となったテイネを引き継いでおり、アルペールビル大会でも当社のスキー場が会場の一つになった。また知的発達障がい者のスペシャルオリンピックス第1回大会(アメリカコロラド州の都市スティームポートスプリングス)もふまえた上で話したい。アルペール</p>

	<p>ビル大会には本当にお金をかけていない。委員の打ち合せは喫茶店で行っていた。そういうことでもオリンピック・パラリンピックは開催できる。</p> <p>1972年の札幌オリンピック開催時には、地下鉄の開通、札幌駅前のビル化など物理的な変化があった。アジェンダ 2020 で盛んに出てくるのは「持続可能性」。これに沿ったコンセプト作りを行わないと選考から漏れる可能性がある。これからのまちづくりに際しては、エネルギー・廃棄物・環境問題を含めた「スマートシティ」を実現することによって札幌が生まれ変わる。選手村をスマートシティにする、水素自動車を導入する、新しい競技場に太陽光エネルギーを取り入れるなど工夫をして、これからの地球の街は札幌がモデルとなってほしい。</p> <p>東京は「おもてなし」だが、札幌は環境・リサイクル面を含め、「人にやさしい」としたい。まだ開催地が決まっていない2025年スペシャルオリンピックも前段として招致のアピールとなる。</p>
川本委員	<p>1972年札幌オリンピック開催時には大学4年だった。札幌に戻り街の変貌を実感した。72年札幌大会の参加国・地域は35だったが、ソチ大会には88の国・地域が参加している。トリノ、バンクーバー、ソチそれぞれの大会にも行ったが、札幌大会には意義があった。</p> <p>加森委員からあったよう多くの国民から協賛を得るためには、建設費を抑えること、地球環境、グローバルの視点が必要。バリアフリー、高齢化社会への対応も課題。そして第二のサステナビリティとして継続可能なものにしていかねばならない。</p> <p>企業がスポーツを支援する文化をぜひつくっていただきたい。</p> <p>土屋ホームが世界で戦える選手を社員に擁して14年目を迎える。</p> <p>オリンピックに葛西紀明、伊藤有希を輩出しているが、昔日本がまだまだ貧しかった時代から選手を応援してきたことが現在につながっている。</p>
久保委員	<p>パラリンピックはまだ普及の段階で、選手、競技面含め発展途上にある。</p> <p>パラリンピアンとしては、次につながる大会にしたいと考える。</p> <p>昨年ソチパラリンピックに出場したが、そこで初めて全競技を衛星放送でライブ中継と録画中継された。</p> <p>大会終了後にたくさんの反響があり、「初めて競技を見ました」との声が多かった。選手として残念だったのが、「新聞、インターネットやニュースで結果は出るが競技中の映像が見られない。どうしたら見られるのか」「私は衛星放送の契約していないので見られない」という声が多く寄せられたこと。そこをどうしたらいいかが選手たちの課題。競技と同時に情報発信していかねばならな</p>

<p>霜觸委員</p>	<p>い。次世代のパラリンピアンのためにも、2020 年東京夏季大会、そして札幌冬季大会とつなげてより良い環境、より良い大会を遺したい。</p> <p>オリンピック・パラリンピック開催都市の福祉は注目されるとき。バリアフリーのまちづくりは障がい者スポーツの普及につながるという思いで活動していきたい。</p> <p>1972 年札幌大会では恵庭岳の滑降コースを 15 年、2 億円以上かけて復元し、負の遺産を後世に伝え、学習している。</p> <p>今度の大会では、2012 年ロンドン夏季大会のコンセプトが役に立つと思う。大会後 20 年先を見据えて利用できる、できない施設、縮小、廃止などの仕分けをきちんと行い、その後のロンドンの発展につなげていった。</p> <p>再び札幌で開催するときは、パラリンピックを重点的にアピールしていくことが必要と思う。オリンピックと融合して開催するまで技術力・運営力が高まるかはこれからの研究だが、施設面でも競技者の視点で建設できればと考えている。競技施設ばかりでなく都市をどうしていくのか。1972 年札幌大会では都市のインフラ整備が進んだが、今度はぜひバリアフリー化し札幌の街を作り変えていくという気持ちで整備が進んでいけばよい。</p> <p>これからは、若者より 65 歳以上の高齢者の人口が非常に増えていく。大会を目指してのバリアフリー化が確実に高齢者社会、将来につながる。それが積雪寒冷地の札幌でもできることが世界にアピールできればいいと考える。</p>
<p>豊島委員</p>	<p>札幌大会開催時には生まれていないが、秋田出身の私もオリンピック・パラリンピックが日本で開催されたことに誇りを持っている。私よりもっと年下の世代には札幌市民であっても札幌で開催されたことを知らない人も多いと思う。</p> <p>昨年の「冬季オリンピック・パラリンピック招致に係る市民アンケート」では「賛成」「どちらかといえば賛成」と答えた市民合わせて 66.7%となった。これが多いか少ないかの判断ではなく、3 割ほどの市民が賛成ではないことに注目した。この方々にも賛成してもらえそうな、みんなで行えるオリンピック・パラリンピックにしたい。</p> <p>最近、アジェンダ 2020 にもあるようにエコなオリンピック・パラリンピックが注目されている。競技施設等では「仮設」「改築」でお金をかけないことにネガティブなイメージを持ちがち。「札幌では仮設でもこれほど素晴らしい施設ができる」「昔のものを再利用しているが、国際基準に適合した素晴らしい施設になっている」といったことで建て替えへの意識改革ができる大会になればいい。</p> <p>夏の 2020 年東京大会に続き、短い期間に札幌で冬の大会開催が実現されることに期待している。「夏は東京で見た、冬は札幌で見た素晴らしい選手のように</p>

	<p>になりたい」と、子どもたちのスポーツへの関心を高めることになればいい。札幌開催を、スポーツを広める手がかりとしたい。</p>
<p>中田委員</p>	<p>1972年に住み慣れた東京を離れ、札幌に来た。既に札幌市の人口は100万人を超えており、オリンピックと同年に政令都市になった。その際に札幌市民が「地下鉄ができたよ」「どれだけ街が変わったか」などと興奮して話してくれたことを楽しく思い出す。</p> <p>もっとさかのぼると、14歳のときに東京オリンピックをきっかけに住み慣れた原宿から目黒に移り住むこととなり、街がオリンピックによって変貌することを体験した。</p> <p>札幌オリンピック開催20年後、バルセロナ大会時にヨーロッパに行った際、サッポロシティから来たというと通用する、北海道よりも知られていると教えられた。これも札幌オリンピック開催の大きな成果だったと思う。</p> <p>次に開催する際には、アジェンダ2020にもあるように、札幌のみではなく「分散開催」も視野に入れるべき。資料にも世界に冠たるニセコ、富良野が出てきているが、札幌のみならず北海道全域、場合によっては青森あたりも視野に入れて、広域での開催ができないか。あまりに離れていると移動しにくいということもあるかと思うが、そういったことも考えた上で広域開催を検討いただきたい。</p> <p>そのために必要なのは、やはり札幌市と北海道の連携。高橋はるみ知事と秋元市長、副知事と副市長の連携ということもあるが、最終的には現場担当部署間の連携を果たして初めて、道民・市民・海外からのお客さまもワンストップでサービスを受けられる状況になる。</p> <p>サッポロシティは冬季アジアスポーツ発祥の地でもあり、ウインタースポーツの先進地。これを誇りとして開催に臨みたい。</p>
<p>原田委員</p>	<p>「つながる」をテーマに挙げたい。</p> <p>1972年にオリンピックが開催されて札幌は急成長した。雪国でも190万都市となった札幌はすでに世界に知られている。スキー競技で世界中を回ったが、札幌を知らない人はほとんどいない。素晴らしい街を前面に打ち出して自信を持って開催したい。</p> <p>スポーツの歴史も受け継がれて、国際大会も開催され、選手も成長し活躍した。</p> <p>市民もそれに感動して勇気ももらったものと思う。このような遺産・レガシーをまたつないでいくことがテーマとなっていくと考える。</p> <p>アジェンダ2020には持続可能性という言葉が本当にたくさん出てくる。IOCもつなげていこうということを前面に打ち出している。札幌市が歴史をつないできた</p>

	<p>おかげで、我々は今ここにいる。札幌市民がもう一度手と手をつなぎ合ってオリンピック・パラリンピックを成功させたいと思う。</p> <p>2026年にはアジアの札幌ではなく、世界の日本が、札幌が、世界中が驚くようなオリンピック開催の名乗りを上げてはどうか。</p> <p>今後、札幌で新しい運営ができ、新しいオリンピック・パラリンピックだったと言われるような大会を目指すのはいかがかと思う。最近大会がマニュアル化し、選手側から見て前回大会と同じことの繰り返しという思いがある。選手側の意見の反映が新しいオリンピックにつながると考えている。</p>
穂積委員	<p>現在は千歳市役所の観光スポーツ部に勤務している。スピードスケートでは2回オリンピックに出場しており、選手の視点とサポート側の視点から考えてみた。</p> <p>選手・監督・関係者が札幌に来てよかったと思えるオリンピック・パラリンピックにすることが重要。入賞者・メダリストを見て感動した子どもたちが「あんなりたい」と思うことによって次世代につながる。長野オリンピックでスピードスケート陣、原田さん率いるスキージャンプ陣がメダルを獲得したのを見て、小学生だった私はメダリストになりたいと思った。自分がメダリストになれたのは、原田さんのおかげと感謝している。</p> <p>札幌にナショナルトレーニングセンターが生まれることは素晴らしい。日本人の選手が感動を与えるプレーをすることで、札幌で開催してよかったと思われる。自分自身は、オリンピック開催の1年前から大会に向けたスピードスケートの練習ができた。可能であればもっと前から日本選手だけでも練習できる環境を国が整えていただくことも重要ではないか。</p> <p>現在は千歳市に住んでいるが、福島県出身。「未来(あした)への道1000Km縦断リレー2015」に参加してきた。外で遊ぶことが難しい被災地の子どもたちから、オリンピックに触れ合えるのは刺激になると言われた。ソチ大会にも被災地の子どもが見に来ていた。オリンピックを通じて次世代につなげるということを考えていただきたい。</p>
三谷委員	<p>公募委員として市民の目線でお話しさせていただきたい。私は十勝出身で、身近にウインタースポーツがあった。スピードスケートの清水選手はあこがれの方だった。</p> <p>世代的には1972年の札幌オリンピックには全く関わりがなかった。身近の方々のオリンピック・パラリンピックへの関心も両極端と感じる。</p> <p>私は札幌市内の真駒内屋外競技場、大倉山ジャンプ競技場に勤めていたこともあり、オリンピックは身近にあった。若い世代に自ら発信していきたい。</p>

	<p>10 年後くらいに私たちが札幌オリンピック・パラリンピックを背負う際には、72 年札幌大会で市民がどのように携わりどのように感じたかを、当時実際携わった人と今の若い世代とで意見交換させていただきたい。オリンピック、パラリンピックともに若者が周知に関わるきっかけとなれば良いと思う。</p> <p>私自身、札幌市の観光ボランティアに携わっており、世界・日本各地から訪れた方が観光都市として札幌は十分魅力的だとおっしゃる。私たち若者世代から発信できるように、冬季大会の 2 度目の開催に向けてプライドをもって臨みたい。</p>
山本委員	<p>「なぜオリンピック・パラリンピックをもう一回開催するのか」はとても重要。</p> <p>私自身は、スポーツ関係者ではあるが「まちづくり」が最優先と考える。どういう街にしたいのかというグランドデザインの中でオリンピック・パラリンピックがどのように活用できるのかという順番でものごとを考えたい。</p> <p>190 万都市の札幌にこれだけ大自然が隣接している。鮭の遡上する川が流れ、標高が低いにも関わらずパウダースノーが降る、世界的でも稀な街。文化的にはクリエイティブな産業も札幌をベースに伸びている。</p> <p>その延長上で、「どういう街をつくっていくのか」というコンセプトの中で、「オリンピック・パラリンピックをどう位置づけるのか」が非常に重要。さらに人がどう変わるのか、特にウインタースポーツのライフスタイルとしての定着が必要。</p> <p>知り合いの冒険スキーヤーの児玉毅さんの「バックカントリースキーの後コーヒーを飲んで会社に行く」というライフスタイルをある種のモデルとして実現できるのが札幌。そういうクールでクリエイティブなまちづくりの基本設計がある中で、今回のオリンピック・パラリンピックを位置づけて弾み石とするという考え方が重要かと思う。</p> <p>皆様のご意見の中には「融合」「シームレス」「継続」「つながる」ということが出てきた。過去と未来、オリンピックとパラリンピックもそうだが、今まで培ってきたものが未来に続いていくという大きなグランドデザインの中で皆さんと議論したい。ウインタースポーツというものをきっかけに、例えば「自然と大都市の融合」、「過去と未来がつながる」などをイメージしながら素敵なまちづくりにオリンピックが生かせるような方向で議論を進めたい。</p>
原田委員長	<p>それではここまで出てきた意見も含め、小林副委員長にご発言をお願いします。</p>
小林副委員長	<p>大学生の時、1972 年札幌オリンピック開催に伴い選手村と仮設食堂、プレスセンターの建築について手伝った。その後札幌の街が大きく変わった。建築だけでなく都市もきちんと考えなければならないということで、都市計画に携わるこ</p>

ととなった。何らかの形でお返しをしたいと思う。

資生堂の福原義春名誉会長が、東京オリンピック・パラリンピック招致でスポーツと文化をセットで考えるというプレゼンテーションをされた。

「2016 年開催招致では内容の濃いプレゼンテーションを行えなかったが、2020 年開催招致では自分でも満足する話ができた。2012 年ロンドン大会では開催決定後の 4 年間にイギリス国内で文化・芸術イベントが 18 万回開催され、4 万人くらいのアスリートやアーティストが参加し大きな集客も得たことを調べ、東京はそれに勝る内容で招致したいと述べたことも成功につながっていると信じている」とおっしゃっている。

2026 年札幌招致の際にも、スポーツと文化の連携を考えなければならない。

ふと立ち止まってみると、72 年開催以降の札幌では、実は非常に文化的な取り組みを進めている。札幌コンサートホール「Kitara」があり、民間のサポートで PMF（パシフィック・ミュージック・フェスティバル）も開催されている。昨年は札幌国際芸術祭も開催された。

72 年当時、札幌はスモッグ都市だった。中心部から大倉山シャンツェが見えないほどで、道路の雪は真っ黒だった。今では信じられないが、72 年招致にあたっては環境に配慮した街にしようという気運が同時並行的にあった。

つまり、札幌はスポーツ、文化、環境を併せて進めてきた。その後、世界で知らない人はいない札幌になったのだと思う。

これから 2026 年開催招致を考えると、どのように世界に評価される中身にするのか、いろいろな面で宿題が与えられている。

札幌市は長期的な計画をつくっているが、市民感覚ではリアルにわからないのが現実。しかし、2026 年のオリンピック・パラリンピック札幌開催、2030 年の北海道新幹線札幌延伸となると、「今から数えて何年目」「具体的にどのようなことがあるのか」と市民の方もイメージが持てる。秋元市長から先ほどお話があったように 2030 年には札幌市の人口は 10 万人減少すると予想されている。長期的にはさらに減少する。そうした状況の中で我々は次の世代に何を遺していくかを問われている。

オリンピックの枠組みとしては二つのベクトルで整理すべきと考える。

一つは「都市化」で、プラスだけでなく負の部分をどう解いていくかも含めた、新しい意味での「都市化」であり、二つ目は皆さんおっしゃっていたが、パラリンピックを含めながら、「より人間らしさを回復する」こと。さらに加えて、より未来を長期的に見据えながら、また世界を、北海道、あるいはアジアを見据えながら、きちんとした枠組みをつくり、市民の方に、北海道民の方に、アジアに、世界にわかるように我々の意思を整理し示すことではないかと考える。

原田委員長	今日ご欠席の志済委員のご意見をあらかじめ伺ってきたので、まとめたものを事務局から願います。
事務局	<p>志済委員から送られていたご意見をお手元にお配りし、ご説明する。</p> <p>(どんなオリンピック・パラリンピックにしたいのか)</p> <p>平成25年に策定した「札幌市まちづくり戦略ビジョン」を踏襲し、持続可能なさっぽろのまちづくりに寄与できるオリンピックの開催を目指すべきと考えます。特に実現したいことは以下のとおりです。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 札幌の新しい魅力を世界中の人々に実感・体感してもらい、新しい国際都市のモデルを実現する <ul style="list-style-type: none"> (ア) 国際輸送、道内輸送手段の拡大(人、モノ) (イ) 外国人ボランティア招聘・スタッフの雇用、海外企業招致の促進 2) 札幌市が後世にわたってサステナブルに発展できるような戦略的投資の実現 <ul style="list-style-type: none"> (ア) 既存施設の再利用や集約化により、新規施設へ過剰投資や広域化による非効率化を抑制する (イ) ハコモノ中心ではなくITやコンテンツといった‘ソフト’主体の投資を促進する。 (ウ) 低炭素型オリンピックの実現 <p>(オリンピック・パラリンピックを通じて何を遺したいのか)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 日本の札幌ではなく、グローバル都市‘Sapporo’としての基盤とノウハウ <ul style="list-style-type: none"> ・国際企業誘致 ・外国人労働者、居住者の受け入れ ・交通・情報 HUB 機能の高度化 ・IT インフラ、デジタル社会インフラ 2) 都市機能の集約化、連携、高度化による、人口減少社会においても持続可能な都市基盤 3) オリンピックでの経験を通じた若い世代のグローバル化のためのノウハウ <ul style="list-style-type: none"> (ア) 国際人としての意識、ダイバーシティ教育 (イ) 世界中の優秀な人材が集まる都市づくりの知恵
原田委員長	<p>それでは、私の方で皆様のご意見をまとめながら、キーワードの整理、あるいはコンセプトの視点などを述べさせていただきます。</p> <p>四つのキーワード(コンセプト)をお話するが、1点目は「つながる」としたい。</p>

原田雅彦委員からも「歴史をつないできた」、「今の札幌があるのは 1972 年から歴史をつないできた」というお話があった。「過去と現在」のつながりもあれば、山本委員からあったように「都市と自然」のつながりもある。あるいは「札幌と世界」、たくさんご発言いただいたが「健常者と障がい者」のつながりもある。「つながり」は非常にいいキーワードになるのではないか。「つながるオリンピック・パラリンピック」ということになると思う。

2 点目は中田委員からも出ていたが、やはり「独創性のある計画」ということが重要ではないか。IOCはオリンピックムーブメントが永続するような計画を求めている。過去の大会を振り返るよりも未来の大会に向けての提案が重要となる。

一つは種目で、「新しい種目」の提案も可能になると思う。

もう一つはアジェンダ 2020 にもあるように「分散開催」。分散することによって札幌、北海道、そしてオールジャパンの体制がくれるので、本州への種目分散ということも考えられる。「札幌でしか開催されていない」ではなく、身近なところで分散開催ができれば、オールジャパンの動きにつながる。今後の検討課題にもなると思うが、1998 年の長野大会のレガシーも活用させていただくなど独創的な計画が今後必要になると思う。

3 点目のキーワードはやはり「レガシー」ではないか。一つ私からの提案だが、オリンピック・パラリンピック施設を作った後、それをどう転用して日常施設に変えるかという発想で計画はつくるが、ぜひそれを逆転して、まず日常的に使う、そこでそれなりの収益が上がる施設を計画する、それをオリパラ施設に転用する、仮施設を加えるといった発想の転換をしていくことが重要と考える。

ロンドン大会の評価が高いのは、やはり「レガシー」。LLDC というロンドンのレガシー開発公社がすべての施設の後利用を行いながら収益を上げていることがある。そういった視点がことさら 2026 年招致には重要になってくる。

施設をつくっても使う人がいないと無駄となる。そこにはイベントの招致、あるいは観光客がたくさん訪れることが必要となる。

昨年日本では人口が 30 万人減ったそうだが、その消費減を 30 万人の中国人観光客の消費が補ったということもある。今後スポーツに関する観光、あるいはスポーツで人を動かす仕組みをつくっていく、それをレガシー、あるいは街のにぎわいに結び付けていくことも重要と考える。

4 点目は皆様からも様々なご意見をいただいたが、「まちづくり」と思う。

山本委員が示唆に富んだお話をされたが、やはり体を動かしたくなるような「まちづくり」。日本の都市は経済効率一辺倒でつくられてきたので、歩道は狭く車最優先社会になっている。ライフスタイルを変えていくような、移住したい、ここに住みたいという夢の生まれるような「まちづくり」も重要。

	<p>バリアフリーの観点では車歩道の段差解消とか電線の地中化は当然のことだと思う。世界に誇れる観光先進都市、コンパクト性と車に頼らないモビリティを十分に活用したアクティブなトランスポーテーションを備えた独創的なまちづくりの計画が実現すると非常にいいのではないかと思う。</p> <p>それでは若干時間があるので、少し個別にご意見を伺いたい。 「アジアにおけるウインタースポーツの拠点」というキーワードが抽出された。北海道、札幌でのウインタースポーツ振興への取り組みが重要になるが、ご専門の山本委員から願います。</p>
山本委員	<p>先ほどライフスタイルの話をしたが、実は次世代の子どもたちが雪や氷で遊ぶ文化が衰退しているのが現実。様々なデータをとっても、日常的にウインタースポーツに親しむ人は、どちらかという減少傾向にある。</p> <p>私は東京出身で、北海道は食べ物を含め素晴らしいと思うが、ライフスタイルの中に芸術、スポーツなど文化的なものが充実することで、街としてとても魅力になってくると考える。スキーもスケートも親しむ人が減っている。オリンピック・パラリンピックを起爆剤にして増やすという考え方もあるが、まず基本的には地道にウインタースポーツの魅力を伝えながら弾みをつけるものとしてオリンピック・パラリンピックを使えるといいと思っている。機会があればウインタースポーツの現状等についてはご報告させていただきたい。直接携わっている方には私以上に詳しい方もいらっしゃるかもしれないが、いずれにせよウインタースポーツが衰退していることはある。</p>
原田委員長	<p>開催概要計画書にはアスリートの意見が重要となっているが、小笠原委員、久保委員、原田委員、穂積委員にプラスアルファのご意見いただきたい。</p>
小笠原委員	<p>日本では歴史は浅いが世界的には 500 年の歴史があるスポーツであるカーリングが続いている。3 年前に札幌市に施設をつくっていただいたおかげで、私も復帰して競技生活を続けさせていただいている。現在、施設の利用が非常に多く、私たちも予約がとれないほど稼働率が高い。施設の整備を札幌市にお願いしてきたが「蓋を開けたらからっぽでは」と不安だったが、連日満員の状況を見てうれしく思う。札幌市内はもちろん、道内、道外からも、例えば観光の家族旅行で来た方が「オリンピックで見たカーリングの施設がある」とふらっと来場する。身近な競技として浸透し喜んでいる。</p> <p>私の育った常呂近隣の小・中・高等学校では、カーリングが体育の授業に組み込まれており、オリンピック選手を毎回輩出する街となった。カーリングのみな</p>

	<p>らず、北海道・札幌で子どもたちが様々なウインタースポーツ競技に携われる選択肢があればいいと思う。ボブスレー、リュージュもあり、札幌ではジャンプのイメージも強い。そこから「オリンピックがあるんだ」「自分たちも目指してみようか」という気になる。私も長野オリンピックのとき、カーリングがオリンピック種目にあるということで、親に頼んで生で見に行かせてもらった。おかげで私も目指して4年後にその場に立つことができた。やはり、日本で目の前にオリンピックがあるということは、子どもたちにとって意義のあること。スピードスケート・フィギュア・アイスホッケーなども含め、様々なスポーツに携われること、施設面でも整備していけばいいと思う。</p>
<p>久保委員</p>	<p>障害者スポーツセンターが北海道にはない。東京にはいくつかあって、本州には各地に、九州にもある。スポーツやイベントの情報を共有できる場がある。私は高校3年生のときに交通事故に遭って車いす生活となったが、その時にパラリンピックでスポーツをやろうと思った。まず道具をどこで購入して、誰に教えてどのようにやればいいのかというところから始まった。北海道はそういう面でまだまだ遅れていると感じる。パラリンピックの選手たちもそのあたりはすごく苦しんでいると思う。どうしても本州の方に行って情報をもたらってくるのが現状となっている。</p>
<p>原田委員</p>	<p>(今の久保委員の意見は)選手の意見が反映されていないと感じる意見だと思う。</p> <p>何でこんなところにこんなものをつくったのかなと、我々からすると感じられることが多々ある。そういったところをやはり改善していくべき。</p> <p>実は昨日、平昌に行ってきた。大会開催は3年後だが、施設がまだ4割5分くらいしかできていない。「とにかくオリンピックが開催できればいい」という状況で、プレオリンピックでは実施されない競技もある。</p> <p>札幌ではやはり「人を成長させるオリンピック・パラリンピック」を開催すべきと考える。</p>
<p>穂積委員</p>	<p>スピードスケートの話になってしまうが、オランダはスピードスケートが国技で、お休みの日でもリンクが満杯。年齢層も子どもから大人、お年寄りまで普通に、スケートが生活の一部として定着しているスポーツ。それを見て、これが強さの背景なのだと思った。スケートは屋外・屋内と様々なパターンがあるが、スケート人口の減っている中では身近となってもらえることが重要だと思う。何かしらのきっかけづくりがあればと、この札幌オリンピック・パラリンピック開催検討も含めて考えていければいいと思う。</p>

<p>原田委員長</p> <p>小林副委員長</p>	<p>今後大会コンセプトを基に競技会場などの配置計画をつくっていくことになると思う。これは新しい札幌のまちづくりに大きく関わっていくことと思う。</p> <p>都市計画ご専門の小林副委員長に、最後にご意見頂戴できればと思う。</p> <p>先ほど建築から都市づくりに自分の領域を変えたというお話を申し上げたが、その時にあるヨーロッパから来たアメリカ人の方から言われた。「まちづくりというのは、建物、道路、公園をつくるのが目的ではない。その街に生まれた子どもが、その街に住み続けたい、そこで仕事をしたいと思えば仕事が見つけられる、それが街をつくっていく本当の目的なんだ」と教えられた。なるべくそのようなことを含めて考えたいと思っている。</p> <p>札幌市も将来どのような街にするかをいろいろな分野で考えている。経済、福祉、道路をつくる部署もある。戦略的に新しい産業をどうつくるかなどを考えているセクションもある。いろいろな考え方、アイデア、場所などを、2026年の招致をきっかけにしながら、より分かりやすく、より説明しやすく、しかも納得のいくように市民の方に伝えて、民間の方と協力しながらそれを実現していくということが大事だと思った。図面に描くということだけでなく、それがいろいろな意味で分散しがちな行政に横串を入れて明快にするというのが招致の議論ではないかと思った。</p>
<p>4 閉会</p>	
<p>原田委員長</p>	<p>みなさま、ありがとうございました。これで今日の会議を終了させていただく。</p> <p>第2回目の会議では、ウインタースポーツの振興についてのご提言を山本委員に、今後の北海道・札幌のまちづくりについてのご提言を小林副委員長にお願いしたいと思うがいかがか。(山本委員、小林副委員長了承)。</p> <p>委員のみなさん、多様なご意見ありがとうございました。</p> <p>事務局は各委員の意見を整理し大会コンセプト案の骨子の作成を進めていただくようお願いする。</p> <p>これをもって第1回目の委員会を終了する。</p> <p>なお、第2回目の委員会は9月3日(木)17時から開催する。</p>

第2回冬季オリンピック・パラリンピック開催概要計画検討委員会 議事録

日時：平成27年9月3日(木)17:00～

場所：STV北2条ビル地下1階AB会議室

出席者：

○委員(五十音順)

石水 創 委員	石屋製菓株式会社 代表取締役社長
加森 公人 委員	加森観光株式会社 代表取締役社長
川本 謙 委員	株式会社土屋ホーム 取締役副会長
小林 英嗣 委員	北海道大学 名誉教授 (一社)都市・地域共創研究所 代表理事
志済 聡子 委員	日本アイ・ビー・エム株式会社 執行役員 インダストリー営業統括 公共営業本部長
霜觸 寛 委員	(一財)札幌市体育協会 会長
豊島 亮 委員	公募委員
中田 美知子 委員	札幌大学 客員教授
原田 宗彦 委員	早稲田大学スポーツ科学学術院 教授
穂積 雅子 委員	元スピードスケート選手
三谷 まゆみ 委員	公募委員
山本 理人 委員	北海道教育大学岩見沢校芸術・スポーツ文化学科 教授

(欠席)

浅香 博文 委員	(一社)札幌市障がい者スポーツ協会会長
石橋 達勇 委員	北海学園大学工学部建築学科 教授
小笠原 歩 委員	カーリング選手(北海道銀行フォルティウス)
久保 恒造 委員	車いす陸上選手(日立ソリューションズ)
原田 雅彦 委員	元スキージャンプ選手、雪印メグミルクスキー部監督

○事務局職員

石川 敏也	(札幌市観光文化局スポーツ担当局長)
西田 健一	(札幌市観光文化局スポーツ部長)
梅田 岳	(札幌市観光文化局スポーツ部 招致推進担当部長)
久米田 真人	(札幌市観光文化局スポーツ部企画事業課 計画担当課長)

次第:

1 開会

2 議事

(1) 大会コンセプト骨子案について

(2) 意見交換

(3) その他

3 閉会

《配布資料》

資料1 第1回検討委員会における各委員の発言要旨

資料2 大会コンセプトの骨子(案)

参考1 第1回検討委員会議事録

発言者	発言要旨
1 開会	
事務局	<p>ただ今から第2回冬季オリンピック・パラリンピック開催概要計画検討委員会を開催させていただきます。</p> <p>本日の議事に入る前に事務局より報告をさせていただきます。</p> <p>本日は浅香委員、石橋委員、小笠原委員、久保委員、原田雅彦委員から欠席する旨ご連絡をいただいている。会議の開催については「冬季オリンピック・パラリンピック開催概要計画検討委員会設置要綱」第4条第5項により、委員の過半数の出席が必要とされている。本日の出席者は、委員17名のところ12名の皆様にご出席いただいております。会議が成立することをまずご報告する。</p> <p>以後の議事進行については原田委員長にお願いする。</p>
2 議事 (1) 大会コンセプト骨子案について	
原田委員長	<p>それでは議事に入る。</p> <p>前回の委員会では、各委員にどんなオリンピック・パラリンピックにすべきか、あるいはオリンピック・パラリンピックを通じて何を残すべきかという2つのテーマについてご発言いただき、コンセプト作りのベースとなるキーワードを抽出した。事務局には、このキーワードを元に大会コンセプトの骨子案を作成していただいた。</p> <p>まず事務局から資料の説明をお願いする。</p>
事務局	(事務局から資料1～2に沿って説明)
(2) 意見交換	
原田委員長	<p>ここからは資料2を元に議論を進めたい。事務局には前回の委員会での委員の発言を元に、「つながる」「独創性」「レガシー」「まちづくり」という4つのテーマから大会コンセプトの骨子案を作成していただいた。本日の委員会では、このテーマについて1つ1つ確認し、追加すべき観点や捕捉などについて意見交換をしていきたい。</p> <p>今日の発言を踏まえて、これが大会基本理念と大会コンセプトに文書として落ちていくので、非常に重要な委員会になるのではないかと。</p> <p>それでは、まず「つながる」について意見交換したい。</p> <p>事務局では「過去と未来」「都市と自然」「オリンピックとパラリンピック」「札幌と世界」「スポーツと文化・教育」という5つのつながりとしてまとめていただいた。このほかの観点からのつながり、あるいは各つながりの補足意見など、何かご意見のある方はご発言をお願いする。</p>

	自由に発言していただくことを今日の基本にしたい。もし発言がなければ私から指名させていただきます。
加森委員	「都市と自然」の中で「環境と人にやさしいオリンピック」などは、訴えるところが非常に強く出せばいいと思う。今日の北海道新聞で、北海道マラソンに参加するためのドネーションなどを募っていた。そういう在り方もあるだろうが、例えば入場料の一部を、スポーツをしたくてもできない子供たちの施設や難病で苦しんでいるところとか、何かに一部を還元できるようなことがあれば、オリンピックも単にスポーツの記録を争うということだけでなく、もっと社会的に大きな、人にやさしい意味ができるのではないか。もう1つ、オリンピック・パラリンピックに集中しているが、スペシャルオリンピックというのもある。これは知的障がい者のオリンピックだが、こういうことも併せて訴えていくことで、より印象に残ってもらえるのではないか。
原田委員長	「つながる」の中には身障者とかハンディキャップの文言が入っていないので、ひょっとしたらそこも重要になるということか。
加森委員	知的障がい者(のオリンピック)も現実にあるので。
山本委員	「スポーツと文化・教育」の中身の文言だが、「オリンピック・パラリンピックを通じ、グローバルな人材を世界へ」という形で書いてあるが、ここはスポーツと他の文化、芸術であるとか音楽であるとか、大会を通じて単にスポーツという文化だけでなく他の文化領域、様々なクリエイティブな世界とスポーツがつながるきっかけになるといいと思う。
原田委員長	文化オリンピックというので、いろいろな文化的な行事があるので、それをさらに強調しようということで、「音・美・体」ですね。
山本委員	そのとおり。
霜觸委員	「札幌と世界」とあるが、札幌と世界がどのようにつながっていくのかがなかなか分からない。ウインタースポーツの先進都市というのは、やはりヨーロッパだと思う。前回会議の冒頭で原田委員長がおっしゃった「東アジアのウインタースポーツの拠点」というかゾーンをまずしっかり確立するという意味で、札幌と世界というより、アジアの中における拠点ということを強調して世界につなげていった方が分かりやすいのではないか。

原田委員長	正に世界を相手にやらなければいけないが、まず現実的なところで足元から。
志済委員	<p>私は9歳の時に真駒内に住んで札幌オリンピックを迎えた。今日、大倉山のジャンプ競技場と真駒内アイスアリーナを見学させていただき、43年前のことがよみがえってくる思いがした。</p> <p>「つながる」という意味では「過去と未来」とあるが、いろいろな施設を拝見したり、札幌がオリンピック以降繰り返し実施してきたいろいろな競技のノウハウといったものは誇れる大きな財産だと思うので、是非それをアピールして生かしていくことが必要ではないかと思う。</p> <p>それから世界という観点では、私も前回「グローバル都市札幌」というのを、何を残したいかという形で出したが、例えばニセコのような、東アジアはもとよりヨーロッパやオーストラリアなど世界中の人たちが札幌に向ける熱い視線を、このオリンピックで使わない手はないのではないか。</p> <p>「独創性」というところにもあるが、東京オリンピックはどちらかというと東京から日本各地を巻き込んでいこうというつながりだと思うが、札幌の場合は道内はもちろん世界に向けてもつながっていきける。オリンピックが終わったらたくさんのリピーターが何度も札幌を訪れてくれるようなつながり方ができるのではないか。それを目指したいと思っている。</p>
原田委員長	正にインバウンドツーリズムの活性化を、これをてこに更に広げていこうということだ。
石水委員	<p>ここのお題にない部分のつながりだが、企業とアスリートのつながりを加えた方がいいのではないか。私のところにもたまに来るのだが、私もアルペンスキーをずっとやっていたので、アルペンスキーをやっている後輩が、全国ではトップレベルなのだが社会人になってまで競技を続けられない内情があり、何とかスポンサーをということでアスリート個人で企業を回るようなことがある。</p> <p>企業としても、アスリートに投資をする価値を見出せないとスポンサーになろうということにつながらない。だから企業がアスリートのスポンサーになる価値がもっと高まると、「レガシー」の部分のアスリートをどう育成するのかということの答えにもたどり着くのではないかと感じている。</p>
原田委員長	これに関して川本委員はいかがか。
川本委員	石水委員からも話があったが、今回の1つの方向性というようなことで、企業活

	<p>動の中でスポーツ文化を支えていくというか、企業の規模によってある程度限られる部分はどうしてもあるが、地域貢献や社会貢献という意味で私どもも発足したけれども、是非この文化を支えていただきたい。そして今も話があったとおり、学校を卒業されたアスリートが残念ながら活動できず断念せざるを得ないということを目の当たりにしていたので、是非この部分で、企業の社会活動の1つのスポーツ支援というようなことを是非うたっていただければと思う。</p>
<p>原田委員長</p>	<p>今の石水委員のご意見は、加森委員のおっしゃった企業の社会貢献的なところと連動してくるのではないか。ウィンタースポーツの場合は選手が自立するのが非常に難しい競技が多いので、そういったビジネスモデル的なものを作り上げていくチャレンジにつながるのではないかと思う。</p>
<p>中田委員</p>	<p>1番目の「つながる」に関しては、「過去と未来」「都市と自然」といった一見対立する概念が一つにつながっていくイメージがあるのでとても良いと思う。ただ、いろいろ話をして考えてみると、一般にオリンピック・パラリンピックとかオリパラという言い方をしている、理解ができるようには進んでいると思うが、恐らく意識の上ではパラリンピックを7割くらいと想定していった方が良いのではないか。普通にやってもオリンピックはそれなりの盛り上がりを示すだろう。むしろパラリンピックをどう考えるのかということに関しては、意識の上で7割くらい頭を持っていった方が良いだろうと思う。内閣府でもオリとパラの間にはドットがないという言い方を「オリパラ」とくっつけているように、意識の上でこれをつなげていくというのをどういう形で表現していったら良いだろうかということを考えて進めていきたいと思った。</p>
<p>原田委員長</p>	<p>前日も身障者スポーツセンターがないというご発言もあったので、非常に貴重だと思う。</p>
<p>加森委員</p>	<p>しつこいようだが、オリンピック・パラリンピックだけでなく、どうせならスペシャルオリンピックの三つを誘致するという姿勢で臨んだ方が。今まで三つを誘致するという姿勢で臨んだことはないのではないか。</p> <p>スペシャルオリンピックというのはケネディ家がスポンサーとなってずっと育ててきた。今の米国大使はケネディ家だから、そういう面では誘致の足がかりがありそうではないかという気もする。</p>
<p>原田委員長</p>	<p>オリンピック以外にスペシャルオリンピックのイベントを誘致する。</p>

加森委員	要するに三つを誘致する。そういう運動もありではないか。
原田委員長	同時期開催はちょっと無理だと思うが、札幌にもコミッションが出来るので、そういった誘致活動もこれから力が入ると思う。
中田委員	みんなで話していると「実はもう一つある」という話が必ず出てくる。昔、アビリンピックというのがあって、これは雇用促進事業団がやっていたものだが、主に知的障がいの人たちを対象にして五輪で競うというようなものがあったようなのだが、そのスペシャルオリンピックも含めて一度調べた上で、オリンピック・パラリンピック、更にもう一つということが可能なかどうかという検討課題かもしれない。
三谷委員	「つながる」という部分で気になるのは、前回は話させていただいたが若者のオリンピック離れというのはかなり深刻な問題なのではないかと思う。テレビにしても何にしても、オリンピックの話というのは季節になってこないとなかなか出てこないくらい未知なものであり、それだけに「つながる」という部分では「過去と未来」のほかに、あえて「世代間交流」というのを入れていただきたいと思う。というのも、先ほど施設見学に行かせていただいた時に、大倉山では修学旅行の方とか高齢の方が普通に楽しそうに、スポーツ施設ではあるが観光施設でもあったりして楽しく利用されているのを見た時に、最終的にこのオリンピックをする上では、若者世代と世代間的に交流させていただいたことで一つの大きな大会の成功があるのではないかと思っている。
原田委員長	若者のオリンピック離れはIOCが抱える最大の論点である。
豊島委員	「つながる」の一番下にある「スポーツと文化・教育」ということで、僕が住んでいる真駒内では、先ほど話に出た PMF であったり、スポーツだけでなく文化との関わりが非常に多くある。それに PMF とつながって周辺の方々が歩道の花植えといったことをやっている。僕はそこに住んでいるので朝早く行って手伝ったりしているのだが、そういったつながっていった一番先の小さな部分まで細かく見ていかないと、なかなか厳しいのではないか。一つの住宅まで行けば良いが、一人一人が大きな場所でつながっていることで満足するのではなく、一人一人がちゃんとつながった結果どういった形になるのかという場所をちゃんと見据えて、「つながる」といったテーマを考えていった方が良いのではないかと思った。ここでは大きなテーマが出ているので、小さい部分まで見ていったときにどこまで細かく見ていけるかというところが重要なのではないかと思う

<p>原田委員長</p>	<p>た。</p> <p>それでは続いて2番目の「独創性」の意見交換に入っていきたい。</p> <p>前回の委員会では独創性に関する意見として「分散開催」「マニュアル化した大会運営からの脱却」という意見を頂いたが、もう少し札幌らしさという視点から独創性についてご意見を頂戴したいと思う。</p> <p>札幌らしい施設整備や大会運営などについてご意見のある方はご発言をお願いしたいが、まず前回欠席された志済委員からご意見を伺いたいと思う。志済委員は前回皆さんにお聞きした「どんなオリンピック・パラリンピックにすべきか」という質問に対して、書面で「後世にわたってサステナブルに発展できるような戦略的投資の実現」という回答をされたが、札幌らしさという視点からの独創性について少しご意見を伺えるだろうか。</p>
<p>志済委員</p>	<p>札幌らしさというところもさることながら、オリンピックはすごくマーケティングオリエンテッドで、スポンサーシップなどで巨額な資金をベースにというのが、ロサンゼルスオリンピックからそういう傾向になってきたかと思うが、やはり投資の対象がどうしても箱物になっているという印象が非常にあって、私がITの人間だから言うわけではないが、ハードではなくソフトをどのように、知財あるいはノウハウ、あるいはいろいろなプロモーションも含めて活用して、もっとソフトを充実するようなオリンピックができないものかと思っている。</p> <p>札幌は映画祭とかコンテンツという観点での人材であるとか、あるいはコールセンターを中心としたITの人材という観点でも、若者を中心にそういう人たちが多いと思っている。ITというと、まだまだWiFiをどう配備するかとか、ロボットだとか、電気自動車をどうするかとか、つながる車をどうするかとか、どうしても箱になってしまうところをソフトでもっていけないのかということが、戦略ビジョンの中でもこういう議論をさせていただいたが、「ソフト主体の投資」とはそういう意味で書いた。</p>
<p>穂積委員</p>	<p>独創性という面では当てはまらないかもしれないが、ソチオリンピックに参加した際、スピード、ショートトラック、フィギュア、カーリング、全ての施設がオリンピックパークという一つの公園内に固まっていた。関係者や応援に来る人たちにはとても利便性が良かったと思う。もちろん分散化の意見にも良い面があるかと思うが、実際に選手が主役で、世界各国から来られる方も利便性を気にしている方々が多いと思うので、志済委員が言ったようにソフトで、またコンパクトにすることもかなり重要ではないかと思う。真似と言ってしまうと語弊があるが、良い面は真似をしてどんどん取り入れていくことも大切ではないか。</p>

	<p>バンクーバーオリンピックやソチオリンピックでは、大会が終了した際、スピードスケートのリンクを取り壊されてしまうことがあった。もちろん存続させていくにはかなり維持費がかかるので仕方ないことだと思うが、さみしい気持ちの方が大きかった。もし札幌でオリンピックを行うと決まった際は、オリンピックが終了しても使用できるように維持費を削減することを踏まえ、スピードスケートの場合は、あくまで私の意見だが、冬はスピードスケートのリンク、夏は陸上のトラックといった、どちらも需要があるような施設を作ってみてはどうか。</p>
<p>原田委員長</p>	<p>正にこういう施設整備にこそ独創性が生かされなければ本当の札幌らしさはないと思うし、今の都市づくりではコンパクト、持続可能性、モビリティマネジメントなどが主流になっている。それは後ほど小林委員からの発表の時に伺いたい。</p>
<p>加森委員</p>	<p>ちょっと矛盾しているかと思うのは、広域分散開催と言いながら札幌らしさというのは、どのように結び付けたら良いのか。72年と今回の違いは会場が分散されるということだと思うが、やはり北海道全員がその気になってもらえるようなキャッチコピーなどでないと。札幌は72年の時にかなり名前が浸透しているから、この辺が変わっていかねばならない。アピールするところが違ってくるのではないかと思う。</p> <p>それから例えばG7を洞爺湖でやった時にルスツが報道センターになって素晴らしい光ケーブルが入ったのだが、終わったら全部撤去してしまった。こんな太い光ケーブルなど要らないという形で、またお金をかけて撤去してしまった。そういうことのないように、せっかく整備した施設をどう生かしていくかということも大事なことではないかと思う。</p> <p>それからまちづくりにも関係するが、水素社会、水素のまちづくりをしていくという面で高圧の水素タンクが必要になってくる。これなどはしっかり作ってしっかり次の世代につなげていくような有効な使い方というのが、オリンピックを契機としてあるのではないかと感じている。</p>
<p>原田委員長</p>	<p>72年の大会の独創性を更に上回る、未来の都市づくりの壮大な社会実験につながるのではないかと思う。</p>
<p>山本委員</p>	<p>先ほどの私の話とも若干かぶるが、「都市と自然」とか「他の文化領域との融合」というつながりを考えたとき、スポーツそのものの見せ方として多様な文化をうまく活用した、クリエイティブ産業などとうまく連携した見せ方。ちょっと矛盾するが、なおかつ自然という視点から言うと人が手づくりでやっているような。</p>

	<p>今のオリンピックの全体傾向で言うと、どちらかといういろいろな批判的な視点も出てきていると思うが、原点に帰るような形で市民が参加して手づくりでおもてなしをするようなイメージの、今までどんどん右肩上がりの、予算も使いマニュアル化したオリンピックだったのを、もう 1 回原点に、市民一人一人が参加しながら手づくりで作るようなもの。それとテクノロジーで何か札幌らしく見せるということ。一見、自然と都市のように矛盾するようなものなのだが、札幌らしく手づくりで素朴で自然が豊かであるにもかかわらず、テクノロジーというのがピリッと入っているような、そんな独創性があると良いと思う。</p>
<p>中田委員</p>	<p>今の東京オリンピック・パラリンピックの国立競技場の問題とか、あるいはロゴの問題などを見ていると、こういった委員会も余り無責任な話とか絵空事のみではいけないのだと考えているのだが、先ほど加森委員がおっしゃったような一見矛盾するような要素があるということは、ちょっと自分で言いながら気にかかったのだが、分散開催について前回発言させていただいて、例えば富良野やニセコ辺りとか、場合によっては青森という話をしたところ、原田委員長から長野も想定した方が、これで初めてオールジャパンということが可能ではないかという話をして、その後もいろいろな人と話をすると、場合によってはロシアも入れたらどうだという意見なども出てきた。私は IOC の細かいルールなどはよく分からないが、それこそオリンピック村というかオリンピックパークから決められた時間内に移動しなければいけないとか、そういったルールがあるというときに、アスリートファーストというのはとても必要な視点だと思う。様々なルールやアスリートファーストといったことで、果たして分散開催を一体どのようにしたら良いかということ、もう少し詰めて考える必要があるのではないかと。</p>
<p>原田委員長</p>	<p>これからの最大の焦点になるのではないかと。また、国立競技場やエンブレムの話は非常にプレッシャーがかかったので、心して議論を続けたい。</p>
<p>霜觸委員</p>	<p>中田委員のおっしゃるとおりだと思う。イメージがなかなかつかめない。分散開催するのであれば分散開催するなりに、どこのポイントでどこの地域を目指すか考えていかないと。穂積委員の発言にあったオリンピックパーク的に、集中的に競技場をきちっとまとめて効率的に運用するようなポイントとか、何か全体で像をつかまないと話が進んでいかないような気がする。確かに各競技のルールは非常に厳しいものだから、「つながる」のところでも出てきたが、どうしても冬期の競技の場合は自然とどう向かい合うかというところが一番問題になる。森林をバンバン切って良いのかということにつながってくるので、どこの地域で開催できるかということが非常に大きなポイントになると思う。</p>

	<p>自然と共生ということが冬季オリンピックの場合は特に強調されなければならない部分なので、我々全体で、どこにポイントを置くか、競技施設をどう配置するのか、あるいは分散する場合はどこに持っていきのかがしっかりつかめていないと議論が進んでいかなぬような気がする。</p>
<p>小林委員</p>	<p>競技をどう分散するかという視点ではなく、地方の側の発想から自分の実感をお伝えしたい。</p> <p>この間、いわゆる増田レポートというのが出た。人口が減少して行って町がなくなる。それに対して今、国全体が地方創生と言って、ひとづくり・まちづくり等々でかなり強烈に支援をしている。でも地方へ行くと、本当に存続できるのか、存続するためにどういう小さなビジネスを作っていかなければいけないのか。コンパクト、つまり自分の町がなくなってしまうのだが、どこに集約するのか。非常に切実な議論をしている。特に東北・北海道というのは、その切実さが強い。</p> <p>その中で 2026 に向けて議論をしようとするときに、加森委員がおっしゃったように、どういうコンセプトでどういう物語、どういう効果を札幌を中心にしながらきちんと考えるのか、というのを最初に必要なのではないかと。</p> <p>そういうきちんとした目標と連携しながら自分たちの町を再生、あるいは生き延びていくと言うと語弊があるが、地方をきちんと創生していくために連携した方が良く向こうが手を挙げてくれるのを期待しつつ、きちんとした主軸を明快にするということがまず大事なのではないか。</p> <p>分散開催というと、札幌が向こうに「ちょっと受け持ってくれよ」というような感じに取られるとまずいと思うので、まず明快なポリシーやコンセプト、それにタッグを組んでも良く向こうの方から言ってくるようなシナリオづくりが大事なのではないか。</p>
<p>原田委員長</p>	<p>分散開催によって、それぞれの地域にまた新しい物語が生まれ、地方が再生していく。そういうシナリオが作れるかどうか。そういう話だ。</p> <p>多分オリンピックの開催概要計画では、そういった発想がこれまでなかったと思うので、一つの独創的なアイデアではないかと思う。</p> <p>それでは、時間もあるのでここで 3 番目の「レガシー」の意見交換に移りたい。ここでは、まず前回の委員会でお知らせしたとおり、委員の方からのご提言をお聞きしたい。「ウインタースポーツ先進都市さっぽろ」の項目の一つに「ウインタースポーツのライフスタイルとしての定着」というのがあるが、ウインタースポーツ振興というテーマで、ご専門の山本委員にご提言をお願いしたい。</p>

山本委員	<p>つたない資料だが、皆さんの議論の何らかの素材になればと思っている。 (スライド資料・P2)</p> <p>札幌の魅力についてだが、分散開催という話が出たので、ひょっとすると札幌に限定しない広がりが出てくるかもしれない。私自身、札幌にいろいろと関わりを持っているが、豊かな自然と大きな都市が非常に身近なところにある。これは札幌の魅力の一つではないかと考えている。</p> <p>自然ということだが、今の我々の生活だと自然に直接触れる機会というのは日常生活の中にあまりない。もちろん自然が豊かで景色として楽しむことはあるが、一方で実際に自然の中に入っていか自然を実感するというような機会は、実は札幌市民の中でもそんなに多いものではないと考えていて、その間を取り結ぶものとして文化というもの是非常に重要なエッセンスではないかと考えている。</p> <p>例えば都市に生活していて、ウインタースポーツでバックカントリースキーをやるという人にとっては、街中で日常生活を行いながら、ごく気軽に1日の中で自然の中に入って、また都市に戻ってくるというようなライフスタイルを構築することができる。こういう都市が世界中にどれくらいあるかと考えると、実はそんなにない。</p> <p>そういった意味からすると、札幌の魅力・札幌らしさといったとき、私がすぐに思い浮かんだのは豊かな自然と非常に大きな街。そういうものが共生できる可能性、そういうモデルを構築するというに一番近い街ではないか。</p> <p>その中で一つのキーワードは文化。とりわけ私の専門はスポーツという文化なので、スポーツ文化というものがこういう自然や都市を結びつけていく。このようなものの契機としてオリンピック・パラリンピックがうまく活用できないかと考えた。</p> <p>(スライド資料・P3)</p> <p>ウインターということなので冬の魅力について少し話をしたい。先ほども言ったように人口200万の大都市でありながら雪と氷の世界が非常に身近にある。今日は時間の関係もあるので雪を中心に話したいが、1972年のオリンピック以前からウインタースポーツは代表的な文化として非常に定着している。更に札幌市民だけでなく北海道民、または日本国民のプライドを醸成するという、トップアスリートが世界で活躍することによって、例えばおらが町・おらが村の選手が世界と互角に渡り合っている。このようなことがウインタースポーツを通して様々な形で札幌市民や北海道民、日本国民のプライドを醸成してきている。</p> <p>とりわけウインタースポーツというのは自然との関わりがあって、札幌市民だけでなく北海道民の多くが親しんでおり、そういうところからジャンプなど数々のアスリートが出てきていて、そういう人たちの活躍が地域プライドを支えていたり、</p>
------	--

そういうものを通じてウインタースポーツというものが札幌や北海道の代表的な文化として定着してきているということがある。

(スライド資料・P4)

ちょっと確認しておきたいのだが、私は東京生まれ東京育ちで北海道歴はまだ17年なのだが、実は今まで札幌の雪ということについて余り掘り下げて考えたことはなかった。北海道は日本で一番北にあるのだから寒いし雪も降るのだろう。その程度しか考えていなかったのだが、本学の小林先生の話聞いていて面白いと思ったことがある。この資料も小林先生から借りてきたもので、ブルーのところは積雪地域なのだが、北海道を北緯43度というところで考えてみたいと思う。ブルーのところは緯度が高いので北海道は非常に多いのだが、これを縦軸で見ると、本州は実際に降雪があるところは標高2,000メートル。こういうところで雪が降る。逆に言うと、雪が降るエリアに行くということになると高度を上げなければいけない。つまり高いところに行かないと雪にありつけないということになる。北海道は標高1,000メートルを切っているところにも積雪地域がたくさん存在している。つまり非常に緯度が低いところでも雪が降る。

(スライド資料・P5)

これを世界的に見てみると、意外なことに北緯43度というのはヨーロッパだと地中海にかかっている。これは非常に世界的にもまれで、日本にいと北海道というのはすごく北で極寒の地と思うかもしれないが、実は地中海とかぶっている。つまり北だから雪が降るわけではなく、世界的に見てもこの緯度で雪が潤沢に降るといのはあまりない。平地で緯度も世界的に見ると高いわけではないにもかかわらず、潤沢に雪が降る。

更にもその雪質はシャンパンスノーと言われるが、ニセコエリアに世界中から人が来るようにパウダースノーが降る。これは非常にまれな、世界中どこを見てもこれだけの雪質が潤沢にあるというのは稀有な場所だということだ。まず、このことにプライドを持ってもらいたい。だから雪を迷惑がらないでほしい。宝物が空から降ってきているのだ。食材もそうで、北海道の人はあまりにも良いものを食べているので、自分たちが良いものを食べていると思っていない。世界的に見ると、非常においしいものを食べて、非常にまれな粉雪が潤沢に降る場所なのだ。

ここのところの冬季オリンピックを見ると、今回北京が決まったが、人工降雪機だと早くから言われている。ウインタースポーツというのは夏のスポーツと比べると、自然と関わりが持てるという意味で非常に魅力的なスポーツが多いわけだが、それを人工降雪でやる。僕の感覚から言うと非常にナンセンスな世界で、そういう意味からしても北海道を中心にウインタースポーツ、とりわけ雪というものと遊ぶ文化というのは非常に大切なのだ。世界の中でもここだけだとい

えるくらい豊かなものなのだ。

余談になるが、親交のある冒険スキーヤーの児玉毅さんといろいろ話をしたことがあって、彼はヨーロッパで氷河を滑って非常に格好良いビデオを撮っている。ところが本音を言うと、もうあまり滑りたくないのだと。見ている分には非常に豪快に格好良く滑っているように見えるけれども、滑っている本人からすると、それほど気持ち良いものではないのだと。やはり北海道でパウダーを滑るといのは非常に気持ち良い。繰り返しになるが、それだけ豊かな雪という自然があるということなのだ。

(スライド資料・P6)

札幌の雪というのは世界的に見ても特別なもので、それだけでも非常に意味や価値があって、雪というものとたわむれる遊び、そういう文化というものを札幌らしさとして強調していくことが非常に重要ではないかと思っている。

(スライド資料・P7)

ただ、スノースポーツの現状を見ていくと極めて厳しい状況がある。これは少し古いデータで札幌大学の塚原先生がまとめてくださったものだが、道内スキー場の推定来場者数は 1991 年から 2005 年でかなり減った。加森委員はもっと詳細なデータを持ち合わせていらっしやと思うが、スキー場も減っている。特に道内でも、札幌近郊やニセコではなく地方にあるスキー場がかなり減っている。札幌市はいろいろな施策を通して、スポーツ実施率を上げようとか文化としての地域アイデンティティを維持強化しようということがあって、具体的に言うと札幌で中学校のスキー授業は一時期3割しかやっていなかった。それは今、いろいろな努力でV字回復しているのだが、そのやり方自体もまだいろいろ課題があり、次世代のスノースポーツに触れてもらうような様々なことをやっているのだが、まだ十分に回復しきれていないのが現状である。

(スライド資料・P8)

これは社会生活基本調査を分析し直したデータで、これも塚原先生に作っていただいた。今、ウインタースポーツの活性化協議会で一緒に仕事をしている。青い部分が人口なのだが、15 歳以上人口はずっと上がってきているのだが、赤い部分はスキーやスノーボードなどスノースポーツの行動者数。緑の線がスノースポーツ行動者の率なのだが、非常に急激な降下をたどっている。世界的にも非常に素晴らしい雪が降る場所なのだが、スノースポーツの行動者数は右肩下がりの状況にあるということだ。

(スライド資料・P9)

男女別に見てみるとスノースポーツ行動者は男性の方が多い。ただ、男性も女性も右肩下がりの状況になってきている。

(スライド資料・P10)

これを年齢別に見ていくと、実は 2011 年の最新のものはここに載っていないが、各年代ともに右肩下がりののだが、実際に活動している層では、減っているとはいえ 15～44 歳の男性が比較的多くスノースポーツをやっている。2011 年のデータを見ると 55～64 歳は 4.4%から 5.9%に上がっており、若干だが回復傾向が見られる。過去にスキーをやっていたリタイアした人たちが、もう一度スキー場に行くという傾向が見られているのではないかと思うが、それ以外はおおむね右肩下がりであることが分かる。

(スライド資料・P11)

これは実際に活動している日数だが、最新のものを入れるとちょっとぼやけてしまうのだが、2006 年までのデータで言うと増えている。つまり実際に行動する人は減っているにもかかわらず、行っている人の平均行動日数は増えているという傾向が見られた。どちらかというとコアでやられている、非常にスノースポーツが好きな人たちは、今までよりも長くスキー場に行ったりバックカントリーに行ったりする。実際に行動している人たちは量的に増えているという傾向が見られていた。

(資料・P12)

これは札幌市が独自に調べたウインタースポーツ実施率で、年に1回以上ウインタースポーツをした人の割合である。全体で見るとそんなに変化がない感じだが、大体 13%前後を推移している状況になっている。13%なので必ずしも多いということではない。このデータはスキー・スノーボードだけでなくスケートも含めた推移なので、スノースポーツと切り分けて考えていただきたい。

(スライド資料・P13)

社会生活基本調査から分かることとしてスノースポーツに関して言うと、札幌のスノースポーツは加速度的に衰退してきている状況が見られる。それから札幌のスノースポーツは、どちらかというと 10～30 代前後の若者が中心になっている。今回の資料にはないがインタビュー調査などから分かることだが、コアな実施者と完全非実施者(の二極化)、やる人は比較のお金も時間も掛けているというような傾向が若干見られることが分かる。

(スライド資料・P14)

ここからは私の考えなのだが、今日はレガシーというところのことだったのだが、私自身もソフトウェアということにウェイトを置いてレガシーを考えていただければと思っている。もちろんハードウェアということもとても重要なのだが、アウトプットとして、オリンピック・パラリンピック以降ウインタースポーツが推進されるということだ。札幌・北海道の文化としてのウインタースポーツというものが、まずきっちりと現状から回復していく。そういう弾み石になってほしいというのが僕の基本的な部分だ。

	<p>もちろん、ここは指導のノウハウであるとか、アジアにおけるウインタースポーツの一つのメッカというか、そのようなものを確立しながらではあるが、ウインタースポーツが推進されていくことを願っている。</p> <p>それと連動して、札幌や北海道でウインタースポーツだけでなくスポーツという文化全体が定着したり発展することがオリンピック・パラリンピック後に起こってほしい。</p> <p>更にその延長線上、少し中長期的に見てどうということが起こってほしいかという、先ほどからあったように他の文化と様々な連携や融合が起こってほしい。そういうものを契機に、今まで札幌で培われてきている IT 関係の企業を中心に、クリエイティブ産業みたいなものが発展していけば面白いのではないかな。</p> <p>更に自然というものと共生するようなモデルとして、世界的にも新たな都市のモデルになるような方向性になっていく。その結果、札幌・北海道に住みたいまちが増えていくということがあれば良い。</p> <p>原田先生がご専門なのでこの中にはあえて書かなかったが、こういうウインタースポーツの推進や発展の中にはインバウンドツーリズム、北海道や札幌に人が来るということはもちろん含まれているが、その辺は後ほど補完していただければと思っている。</p> <p>(スライド資料・P15)</p> <p>まとめにかえてということだが、やはり市民に早くから参画していただき、市民が手づくりでやる。非常に大掛かりなマニュアル化されたオリンピックをやるというよりも、なるべく手づくりで。前回の会議でも出ていたが、そういう手づくり感満載のオリンピックであれば面白いのではないかな。そのことが結果として市民の様々な活動を通して人が成長するというような、自分たちで自分たちのまちをより良くするというような人づくりにつながっていけば良いのではないかな。</p> <p>ウインタースポーツの関係で言うと新しいライフスタイル。文化、とりわけウインタースポーツなどが日常的に生活の中にあふれているような、そういう新しいライフスタイルを創造して、そういうものを発信できるような方向性がオリンピック・パラリンピックの後に札幌市民や北海道民の中に定着したり、そういうものを発信するようなことが起こってくれたら良いのではないかと考えている。</p> <p>原田委員長 非常に貴重なお話を伺うことができた。</p> <p>では、続けてレガシーについて意見交換したい。今の発表と連動する話でも結構だし、資料に示した論点に基づいて議論を進めていこうと思うが、次の 2 点についてご意見を伺いたい。</p> <p>一つ目は若い世代のウインタースポーツ実施率はどうすれば向上するか。</p> <p>2 点目はアスリートをどう育成していくか。</p>
--	---

<p>志済委員</p>	<p>これについてご意見を聞かせていただきたい。</p> <p>これは北海道だけでなく、長野も新潟もみんなスキー場が悩んでいる問題である。インバウンドは徐々に増えているが、それでもスキー離れというのはかなり顕著になっている。これは世界的な傾向でもある。</p> <p>今の山本委員のお話には非常に興味があって、そのとおりでと思ったのだが、私も東京に長いと、30分以内でゴルフ場に行ってさっと帰ってくるとか30分以内に山へ行って滑って帰ってくるというのが、東京ではどんなに困難なことかという、1~2日がかかりくらいの作業になってしまう。本当にうらやましい限りなのだが、その場にいると、その価値とか有り難みというのはよく分からなくて、そういう人たちに「あなた恵まれているのだからやりなさいよ」と言っても、なかなか厳しい面があると思うので、今おっしゃったようにインバウンドなどで、もちろんこれは外国だけでなく東京や九州から北海道へ来てウインタースポーツを楽しむことを、わざわざお金をかけてやる人たちがいるのだから、問題は、そういう人たちに対して、顧客体験というか、北海道・札幌に来て、そういう素晴らしい体験をしてもらうことがまず必要なのではないかと感じた。それをいろいろな形で発信してもらおう。今、SNSやネットワークの声というのがものすごく大きくなっている。だから良い顧客体験を札幌・北海道でしてくれた人たち、特に若い人たちが、「札幌っていいぜ」とか「ここってオシャレ」とか「ここって楽しかった」というようなものをどんどん発信してもらえるようなシティープロモーションだとか、先ほど広域開催の話もあったが、アスリートの視点から、それから観戦のために札幌を訪れる人たちの動線がどうなのか。そういう人たちにとって広域開催のロケーションはどのような魅力があり、どのような行きづらさがあり、ベストな動線とは何なのか。そのようなことを来た人の身になって考えていくことで、ベストな顧客体験をして帰って行って、それが道内・札幌の人たちの気持ちをまた呼び起こす。そういう循環になっていけば良いのではないかと感じた。</p>
<p>原田委員長</p>	<p>2012年のロンドン五輪はMOST CONNECTED GAMES、いわゆるSNSでもっともつながったオリンピックと言われて、では2020年はどういうオリンピックになるのか、2026年はどういうオリンピックになるのかというのは、今からかなり予測しておかなければならない。多分SNSは想像を絶するくらい発展するのではないかと感じた。これはシティマーケティングにとって非常に重要なので、是非SNSなどのCGM(Consumer Generated Media)を念頭に、こういう体験コンセプトを作っていかなければならないのではないかと感じた。</p>
<p>三谷委員</p>	<p>志済委員の話と重複するかもしれないが、改めて考えてみた。道産子である私</p>

	<p>たちは雪というものは当たり前すぎて、わざわざ雪の中でスポーツをしたいとか、どちらかという家にいたいとか、そんな感じが本音なのかなと正直思っている。</p> <p>ただ、私は十勝出身で、十勝ではウインタースポーツの競技場とか、特に帯広の森というのがある。スキー場やスケート場というのはかなり大々的にPRされている。至る所にチラシがあったりホームページがあったり、広報に力を入れていたり、十勝では競技場というものがものすごく身近にあった。ただ、札幌に来て、改めて私たちが施設を使いたい、スケートがしたいと友達と話になったりする。スキーをやりたいという話になったとする。そのときに思いつくのが広報さっぽろだけのような感じがしてしまう。それくらい私たちにとって札幌のウインタースポーツ競技場というのはあまり身近ではないのではないかと思った。何かPRをSNSなどにもっとやっていただくことで、広報さっぽろとかそういうもの以外の部分でも思いついたりするのではないかと思った。</p>
原田委員長	<p>市民が気軽にスポーツ施設を使える、施設マネジメントの独創的な計画だ。非常に重要な点だと思う。特にレガシーを考えた場合、重要だ。</p>
中田委員	<p>1972年に札幌に来て、その当時のことを思い出すと、どこの公園でも子供たちがジャンプ台を作って遊んでいた。その時の札幌の人たちはどうかというと、今年はおリンだとかロシニョールだとか毎年いろいろなスキー板を買い、服も全部買い替えていた。それが、きっかけはそれぞれいろいろあったと思うが、私自身はスパイクタイヤがなくなった時から怖くなったのと、スノーボードとスキーが混在するようになったことがきっかけになってやめてしまったということがある。</p> <p>かなり手強いと思うのは、先ほどの話にあった中学校でも6割が(スキー授業を)やっていないということだが、学校でのスキー・スケートの教育体制の考え方自体が、あの頃と比べると少し気持ちとして落ちてきていると思う。</p> <p>そんな話をすると必ず教育現場の皆さんがおっしゃるのは、実は子供たちだけでなく先生がスキーをできない。それで教えることができなくなってきている。だから指導者の育成というのは、学校教育を進めていく上では先生のレベルも上げていかないと、教育がなかなかできなくなるのだろうということもあるので、かなり本気でかかっていると人口を増やすのは大変だという気がする。</p>
原田委員長	<p>スキー文化が劣化しているような、そういう危機的状況がある。</p>
石水委員	<p>若者のスキー離れの部分だが、私もずっとスキーを子供の頃からやらせてもら</p>

	<p>っていたわけだが、同じスキーをやっていた人たちに、将来自分の子供たちにスキーをやらせるかと聞くと、そういうことはやらせないと思う。なぜかという、お金がかかるから。ウインタースポーツは、道具を揃えたり場所代を考えるとすごくお金がかかるというのが一つのネックになっている部分なのではないか。</p> <p>ただ、それ以上の魅力は間違いなくあると思う。志済委員もおっしゃっていたとおり、道外の方は北海道に来たときに必ず子供たちにウインタースポーツをやらせるという印象がすごくある。転勤で3年間くらい北海道に暮らしていた人は、これを機会にどんどんスキーをやらせようとかスケートをやらせようとか、ウインタースポーツに触れさせようという意識があるが、逆に道民は雪が当たり前になりすぎていて、そういうのはなかなか億劫になっているところがあるのではないか。</p> <p>先ほどの教育の部分でもそうだと思うが、スキー経験者が、今までスキーにお世話になってきたということも含めて、指導したり啓蒙活動をすることが必要になってくるのではないかと思う。</p>
<p>加森委員</p>	<p>皆さんの話を聞いていると分からなくなってしまう。ウインタースポーツを振興しようとしているのか、オリンピックを呼び込もうとしているのか、この辺がよく分からなくなってしまう。</p> <p>確かにこれから20何年の歳月の間に今の子どもたちを良い選手に育てることは大切だと思う。スキーのマーケットに関して言えば、スキーの魅力がなくなったからだ。リフト代が安くなったらお客さんが減っていった。ゴルフもそうだ。ゴルフが高かったからゴルフ。テニスも格好良かったからテニスをする。それはテニス(コート)も駐車場に変わってしまったし、ゴルフも何千円かになったら行かなくなって会員にもならない。スキーもリフトの料金が下がってからぐっと下がってきた。だから、あこがれがなくなってしまったというのが一つ。</p> <p>もし子供たちにスキーなどをさせるのであれば、極端な言い方をすればマンガなのだ。ポケモンにスキーをさせるとか妖怪ウォッチにスキーをさせるとか、そういうところから始めると、子供たちはそれに啓蒙されてくると思う。</p> <p>マーケティング論よりどうやって強烈に札幌に引っ張ってくるためのキャッチフレーズや考え方が必要なのか、ということの会だと私は思っている。こういう論議をしたら、ずっとこの会議が終わるまでウインタースポーツを一体どうしたら良いのかということになってしまうので、その辺を間違えないようにやっていただきたい。</p>
<p>原田委員長</p>	<p>先ほどの中田委員のように、72年が終わってからみんなジャンプ台を作って飛</p>

<p>小林副委員長</p>	<p>んでいたみたいなの、やはりヒーローも大事だし、加森委員がおっしゃったようにマンガも大事だと思うが、一つ重要なことは、26年のオリンピックをやることによって、レガシーとしてウインタースポーツが更に振興されるという視点を忘れないようにしたいと考えている。</p> <p>それでは最後に「まちづくり」の意見交換に移りたい。</p> <p>ここでも最初に提言をお聞きしたい。都市計画がご専門の小林副委員長より「新しい札幌のまちづくり」というテーマでご提言をお願いしたい。</p> <p>山本委員からレガシーの話があった。物理的なレガシーとソフトがある。では72年の時はどのようなレガシーを我々に与えてくれたかを振り返りながら。</p> <p>(スライド資料・P3)</p> <p>ものとしては選手村が出来たのだが、大事なのは日本で最初、あるいはヨーロッパに伍するような地域暖房、つまり生活を支えるようなインフラを作ろうという先取性が、場面として選手村で展開された。それが今の我々の生活に還元されている。</p> <p>(スライド資料・P4)</p> <p>地下鉄も当たり前であるが、ここで大事なことは、これだけ雪が多く人口が100万人を超えるような都市は世界で札幌だけだ。そのときに将来のことを考えながら、いつでも・どこにいても・誰でも利用できるようなインフラをどうやって作り、残すのか、そして生活水準を上げるのかということを考えて、結果として地下鉄というものにチャレンジした。</p> <p>(スライド資料・P5)</p> <p>同じように地下のネットワークが出来ており、現在も少しずつ増えている。これも100万都市を目指しながら、四季を問わず街を自由に使うことができるようなネットワークは何なのか。この時、地下街の案とスカイウェイの2つの案があった。結局、札幌は地下のネットワークにチャレンジして、福岡・名古屋にもあるが、そういうものとはちょっと違う、市民が愛することができる利用しやすい地下街が出来た。これがどんどん中心部に広がっていく。そういうシナリオがここで出来上がった。</p> <p>(スライド資料・P6)</p> <p>我々は街の中から地下鉄を利用し、高速道路を利用して東京まで行くとき、冬でも雨の日でもほとんどシームレスに行くことができる。そういうインフラを作った。これも当たり前になっている。これがないと我々の日常生活、あるいはリゾートの利用の仕方等々もできないわけだ。そういう基本的なインフラを作ろう、生活や産業を支える、そういうようなことで結果として高速道路のネットワークを、国も含めながらネットワークを作ることができた。</p>
---------------	--

(スライド資料・P7)

今、豊平川や創成川をいろいろな形で利用されていると思う。豊平川のそばには幹線道路が通っている。創成川も先日アンダーパスが出来た。このように産業・生活を支える骨組みを将来にどうやって残すのか、何をきっかけにして残すのかということが大事な、その当時はレガシーという言い方はしていなかったが、結果としてそういうようなものになっている。

(スライド資料・P8)

先ほど中田委員が昔の話をされたが、昭和36年の都心部はこのような状態だった。それで札幌は公害をなくすことにチャレンジし始めた。そして今、街の中心部のビルは地域暖房を利用することが当たり前になってきたが、これも極めて先駆的な試みをやったわけだ。

(スライド資料・P9)

現在は名前が変わっているが、厚生年金会館も日本でかなり早い方。そういう場を作りながら市民が音楽や様々な芸術等々と接するようなプログラムをスタートさせようとした。その結果、今は札幌も持っているしPMFもあるし、環境と文化を2本柱でいくような、日本をリードしていく状態になっている札幌が出来上がった。

(スライド資料・P10)

その時に国際都市サッポロというのをキャッチフレーズにした。この時、サッポロをあえて漢字ではなくカタカナで書いた。今までの札幌とはちょっと違う意味合いで「サッポロ」を作ろうと。しかも国際的に信頼される、国際的に情報を出していく、そういう国際的なモデルになるような形にしようというキャッチフレーズだった。その結果、我々が日常的に生活できる街が出来ている。

(スライド資料・P11)

その時、市民を含めた共通の意識というのは「先駆的な実験を継続し続けていくまち」。それがカタカナのサッポロなのだ。結果として世界と結び付く。今、北方都市との交流が極めて広がった。それから北の都市機能を創造する。今お話ししたような我々の生活と経済を支える基盤が整えられた。

それと先駆的な実験を継続する。今、創造都市ということで、これまでに加えてチャレンジしていく。だから札幌が出来上がって以来、佐賀藩にサポートされて札幌が出来た。島判官が入ってきたが、その時から「新しい理想都市を北に築くのだ」というのが連綿として続いてきているし、この時に一つの花を咲かせたわけだ。

(スライド資料・P12)

では今、2026年を目指して、ここではあえてひらがなで書いているが、創造都市さっぽろをどのように考えるのかというのが誘致するときの条件として、ある

いは我々の次の世代への遺産として何を残すのかということが同時に問われていると思う。

(スライド資料・P13)

やはり大事なものは、先駆的な試みを継続することが基本的な精神として、昔の札幌人、今の札幌人、それから将来の札幌人に対しても伝えていくことではないかと思う。

(スライド資料・P14)

ではオリンピック・パラリンピックが目指すものは何かを考えると、何を指すのか・何を残すのかということと、誘致のシナリオ・物語がきちんと重なっている必要があるだろうと思う。

(スライド資料・P15)

実は 2015 年は人口が減り始めた年だ。2026 年にかけて人口はどんどん減っていき、高齢者は増えていく。人口は減っていくのだが、数が多いことが本当に正しいかどうかということも問題。ヨーロッパの人口は随分昔に減り始めた。でもヨーロッパは魅力があって我々に行く。成熟した生活・成熟した文化を含めて、彼らはプライドを持ちながらそこで営みを続けている。

(スライド資料・P16)

そういう中で目指すべき都市像というのを今、大きなシナリオとしては「まちづくり戦略ビジョン」という長期的なビジョンを札幌市は持っている。これと呼应しながら、これを実現するためのきっかけとして、2026 年の誘致を市民や企業と一緒にどうやって具体的に実現していくか。自分は何をするのか、企業は何をするのか。市民個人として何をするのか、あるいはグループとして何をするのかという話がリアルに 2026 年に向けて夢をつむいでいくようなことを、我々は整理しなければいけないのではないかと思っている。

(スライド資料・P17)

そのヒントになるようなものをこれから幾つかお見せする。

写真は姉妹都市ポートランドだ。これは札幌で言うと創成川の東側の倉庫街だったようなところ。これを 72 年から物語を作って、このようにパブリックな場所を作った。このような、みんながいつでも四季を通じて集えるところに、誰でも行けるような施設、先ほど原田委員長もモビリティマネジメントとおっしゃったが、ツールを作るのか。こういうことにチャレンジする機会、あるいは目標の一つとして加えて良いのではないかと思う。

(スライド資料・P18)

それから先ほどコンパクトという話が出た。これはフライブルクという人口は少ないが有名な都市だ。右上の写真は、以前は路上駐車が一杯だったところだが、ガラッと変えた。そうすると車で来るよりも、このように快適に、カフェで人と

出会ったり、そぞろ歩く楽しさ、これは人間の根源的な楽しさなので、そういう楽しさが享受できるような、より人間的で近づきやすい、利用しやすい環境をどのように作っていくかという社会実験をやったわけだ。

(スライド資料・P19)

札幌は、東京と比べると時間が短い、30分かけて職場から家まで行く。でも、これからのライフスタイル・ワークスタイルが今のようないのだろうか。もっと自由な時間を使いながら、家族を大事にして地域を大事にしていくようなことができるような環境に、どのように置き換えていくのか。これはストックホルムの例だが、そんなワークライフバランスを支えるような場をみんなで探して、企業と一緒にやりながら実現していくというきっかけにも利用できるのではないかと思う。

(スライド資料・P20)

それから先ほどパラリンピックの話が出たが、昔からユニバーサルデザインという、誰でも・いつでも・どこへでも行けるような、世代を超えて、特定の教育の時間だけそういう教育プログラムに入るということではなく、いつでも・誰でも・どこでもできるようなものがユニバーサル。こういうものを志向していくことが成熟していく都市の必要条件であると思う。

(スライド資料・P21)

それから今は人がAという場所からBという場所へ移動するために、非常にたくさん方法がある。ただ、例えば自家用車1台に1人が乗り、500人が街中へ動こうとすると、電車やLRTで500人が動くときでは、必要となる面積が全然違う。だから、なるべく人と人が時速3kmとか4kmで歩きながら、アイコンタクト等々ができるような、人のぬくもりを感じられるような生活を支える交通モードというものを札幌で発見していかなければいけない。それと先ほど加森委員がおっしゃった水素とをどのようにクロスさせるかというチャレンジも、地下鉄以降の物語として我々が描く必要があるのではないか。

(スライド資料・P22)

写真はクリチバというブラジルの南の方の都市だ。これは1965年に計画を作って73年に運行開始した。これはBRTといって連節バスというか3台くらいの車両がつながって、250メートル置きに停留所があり、非常にスムーズだ。自家用車の数が減り、同時に身障者もあのようにできる。こういう新しいシステムにチャレンジしている。これは世界でも極めて高く評価されている。それに伍するようなチャレンジというのが我々の目の前にある。それをやるかどうかということだと思う。

(スライド資料・P23)

左の写真もクリチバという町。これは河川沿いのところだが、荒れた川だったと

ころが、このように自然と共生する。実は、この草地管理は人間の手ではなく動物がやっている。

右の二つは、これもポートランドの町のだ真ん中にある公園。これは雨水を下
水に流して川に送り込むのではなく、この池にためて循環させ、トイレの水など
中水として利用できるようにしよう。しかも、ここには野生の鳥が来る。それが
町のだ真ん中にある。これを彼らも 72 年からチャレンジして、今こういう魅力的
なインフラに変えているわけだ。

(スライド資料・P24)

右のは福岡、左はポートランドだが、先ほどのような自然と都市が近づきなが
ら、その結果、世界の環境に貢献する。自分たちの小さな試みが世界の環境
問題を解いていくというシナリオが見えるようにしている例である。

(スライド資料・P25)

エネルギーに対しても、ゼロ・エネルギービルディングという、自分の中でエネ
ルギーを完結させて外からはもらわないという ZEB と称するものだが、実は札
幌の研究者や企業はこれに対して非常にセンシティブで、世界の中でも進んで
いるが、なかなか実験する場がないという状況。そういう技術や能力をどのよう
に活用して、それを世界に売ることかということも大事なのではないか。

(スライド資料・P26)

それから何回も出てきたが、スポーツと文化のインフラ数。札幌にはこういう文
化のインフラが一杯ある。創造都市としてユネスコからも認定されている。そう
いうことと、どのようにしてスポーツ、あるいはアスリートを支えるようなたくさ
んの産業、そういうものとどのように、あるいは美しさみたいなものとどうクロスす
ることかということが問われていると思う。

(スライド資料・P27)

新しい「さっぽろ」、この委員会の資料では札幌と漢字で書いてあるが、あえて
「さっぽろ」としている。やはり今までのような我々の先輩たちが作ってきた精神
を受け継ぎながら、超高齢化に対するたくさんの問題を解いていく北のモデル
を作ることができるのではないか。

それから、より人間的なライフスタイル・生活環境の創出。たくさんの方
が人間的とおっしゃるが、雪が降って四季が明快でスポーツとも連携できるよう
なライフスタイル、で、100 万の魅力。もう広域 200 万だが、そういう魅力を最大
限売りにする。先ほどアジアのハブと言われたが、そういうことも含めて、どうい
うようなことを強く意識しながら進めていくのか。

真駒内も、先ほど選手村等々の話をしたが、レガシーが既にある。そのレガシ
ーに更に磨きをかけるということも我々にとっての宿題のような気もする。

それから選手村が、あるまとまったエリアに出来ると思うが、そこで先駆的な環

	<p>境モデルにどのようにチャレンジするのか。これは我々が問われている、大きな世界の問題を解いていくためのシナリオを作っていく。技術を駆使する場を作り上げていくことにチャレンジする良いチャンスのような気がする。</p> <p>それと、まちは行政が作る、道路は国が作るというように思ってきたわけだが、実は企業も参加する。それから市民も一緒になって、先ほど花の話があったが、磨いていく。使い込んでいく。良いものにしていく。そういう競争というものがスタートしているわけだ。</p> <p>それで北の創造都市。北というのはたくさんあるという話を先ほどされたが、その中でキラリと光る創造都市というのにチャレンジする。それをみんなで、ある時をきっかけにして、あることの時間を目標にしながら行動を共にしませんかと。そうすると、このような素晴らしい時間を世界の人たちと共有することができて、その後、自分たちの子や孫の世代に、より磨きのかかった、彼らの生活を支えることができるような精神と、ある環境を伝えていく。そういうことを是非みんなでチャレンジしませんかと。それがまちづくりの基本的なポリシーではないかと思う。</p>
<p>原田委員長</p>	<p>先生のプレゼンの中でたくさんの課題を頂戴したが、いずれもそれほど実現するのが大変ではなく、しかも夢のある、本当にこうなったら良いというご提言をたくさんいただいた。</p> <p>続いて、少し時間を取って「まちづくり」について意見交換をしたい。資料2で示した論点に基づき議論を進めていきたいと思うが、3つの点についてご意見を伺いたい。</p> <p>①1972年との違いは何か ②オリンピックを通じて人の暮らしがどう変わるか ③まちづくり長期ビジョンとどう結び付けるか</p> <p>について、ご意見のある方は発言をお願いします。</p>
<p>志済委員</p>	<p>私も小林副委員長と同じく2013年から札幌市のまちづくりビジョンの委員としてご一緒させていただいたのだが、主に③になるが、小林委員のご指摘のとおり、まちづくりビジョンの中で、1972年のオリンピックをきっかけに拡大してきた札幌市を、人口減少の時代になって、あるいはいろいろなインフラの老朽化という問題に直面して、どうコンパクト化していくかという議論をしているときに、一度拡大してしまうと、そこにまつわる何十年と続くインフラの維持コストを縮小していくことがどれほど難しいかという議論を随分した。その中で私たちは都市計画の在り方・ランドデザインをきちんと描いたと思うので、是非それを踏襲していくべきだと思っている。</p>

	<p>今、東京は未曾有のマンション建設ラッシュになって、皆さん 2020 年までの不動産価値といったものを考えてはいると思うが、その後それがどうなるだろうか。また不動産バブルのようなことが起きるのではないかと個人的に思ったりもする。コモディティが導入されると一気に拡大したくなるようなモメンタムが出来てしまうことを抑えていかなければいけない。</p> <p>と同時に、同じくまちづくりの中で話をした北方圏型のエネルギーマネージメントといったものを、低炭素型のエネルギーマネージメントをどう作っていくかということ、このオリンピックというチャンスを生かして、そこにいろいろな投資を呼び込んでいくような特徴を出せば良いのではないかと考えている。</p> <p>前回の議事録を拝見して、スマートシティの話もあったと思うが、先ほど選手村の話があったが、選手村に限らず街全体がスマート化していくようなオリンピックといったものも考えられるのではないかと考える。</p> <p>バスの話もあったが、天候の悪化や人の動線がどうなるかによって、バスなどの交通網の整理といったものも、いろいろなことを考えていかなければいけないので、そういったものも今後としてはやる価値があるのではないかと考える。</p> <p>そういったものを総合して札幌オリンピックの新しい価値みたいなものを訴求していけるのではないかと考えた。</p>
霜觸委員	<p>前回は申し上げたが、パラリンピックに今回の大会の重点を置いたら、というお話があった。パラリンピックでいろいろな会場ないしは選手村というものを作るわけだ。相当な配慮というか、それに向けた施設整備がなされるというか、環境づくりをしなければならない。その技術を、これからいろいろなITテクノロジーを活用しながらどんどん高度化していく。それをまちづくりに生かしていくというか、ユニバーサル化していく。それが超高齢化社会を迎えるであろう札幌につながっていくという流れになれば、市民も相当共感してくれるのではないかと考える。</p> <p>そういった意味で、パラリンピックで使ったいろいろなテクノロジーを是非まちづくりに生かしていく。そのように考えていくと市民の皆さんの賛同を得られるのではないかと考える。そこに重点を置いて考えていく必要があるのではないかと考える。</p>
川本委員	<p>「住み続けたいと思えるまちへ」というようなことが書いてあるわけだが、人がどのようにして来たいと思えるかというなら、私も今まで3度ほど冬季オリンピックを海外で見ていたわけだが、やはり宿泊などが困る。もちろんホテルは非常に良いところもあれば、それなりのホテルというような形のものだが、是非ホームステイのようなものを何か、今までよそになかった充実したものはないか。そうすると先ほどあったように世代間の交流というのもできるかもしれないし、日本</p>

	<p>だとか北海道・札幌をよく知ってもらえる。また、文化だとか生活だとか、そんなことで本当の交流ができる。これはオリンピックだけでなく、インバウンドの方々には、そういう生活を体験してみたいというのは必ずいると思う。それを札幌でホームステイ制度というか、そういうようなものを設けて、そしてそこを活用してもらおうというような形になれば、より交流を深めて、行ってみたい、行きたいという形になる。そして、それがずっと続けられれば良いと思っている。</p>
穂積委員	<p>川本委員がおっしゃったホームステイだが、私がバンクーバーオリンピックに行った時に両親が地元の日本人家庭にホームステイさせていただいた。私がオリンピックに出場することが決まってからホテルを取るとなると、もう予約が一杯で、オリンピック期間になるとホテルの料金が倍くらい取られてしまう。海外から来た方だと時差調整が必要で、例えば自分の子供が出るとなると1日だけで帰ることはなかなか難しい。応援の方が2~3日、種目が多い選手だと1週間滞在するとなると、交通費と宿泊費でかなりの負担がかかってしまうので、ホームステイ制度はとても良いことだと思う。</p> <p>オリンピック期間といっても、長くて2~3週間程度の短い期間となる。その期間が終わってから選手村を別の方が使用する形になると思うが、開催後に、あまり高級マンションとして売り出すと、なかなかその先の利用が難しくなる。もともと身近に利用できるような宿泊施設、選手村のアpartメントを建設することも大事だと思う。</p>
原田委員長	<p>今、東京もホテルが取れない状態で、このまま2020年になったらどうするのだというくらい。</p>
加森委員	<p>小林委員の説明を聞いて非常に感銘を受けた。やはり未来をどう創造していくかということが一番のテーマになるのではないかと思うし、その未来をどういう形で作っていくかというのは、環境問題をどうしていくのか、あるいはこれから年寄りも増える中で、老若男女を問わず世界中の人にどれだけ優しく接することができるのか、あるいは暖かくお迎えすることができるのか。こういうことをどうしたら良いのか。ITなども、それを中心として駆使していく。これから20年後のITの世界など我々には想像もつかない。わずか15年でこれだけ発展するのだから、15年後にどうなるのかというのは、ほとんど想像がつかないと思うが、それに向かっていくという大切さもあるのではないかと思う。</p> <p>ハード的には新幹線が札幌で止まらなければならないという理由はないわけで、千歳までもっていく。飛行場と新幹線が直結すると15分くらいで札幌に来てしまう。このオリンピックの機会に千歳まで新幹線を延長していく。高速鉄道</p>

<p>山本委員</p>	<p>が空港と直結しているのは世界でもあまりないので、こういうこともお客さんを迎えるため、あるいはそれが将来のレガシーになっていくのではないかと。</p> <p>②の方にかかってしまうかもしれないが、今の霜觸委員や小林委員のご意見はすごく参考になって大変勉強になったのだが、まず一つ目は共感というか市民である。コンセプトを作る上で、市民であるとか道民であるとか国民が「なるほど」と思うのはすごく重要で、加森委員がおっしゃったような環境であるとか、今後の高齢者の問題とか、いわゆるバリアフリーの問題も含めてだが、そういうものが市民にちゃんと伝わるような、そういうコンセプトにしなければいけないというのが大前提ではないか。</p> <p>二つ目のきっかけというところに関係するのだが、将来の理想像はこうだということはみんな描いているかもしれないが、ではオリンピック・パラリンピックはそれに役に立つのか。つまりまちづくりをユニバーサルにしようとか環境の話だけであれば、別にオリンピック・パラリンピックというのは直接的な関係はない。ただ、オリンピック・パラリンピックが何かのきっかけになる、例えば市民が気づくとか、具体的な行動・活動に参加できるとか、そういうところがすごく重要で、これは前にウインタースポーツ活性化協議会で話をして物議をかもしってしまったのだが、例えば交通インフラの話で言うと、駅前から大通りでクロスカントリーのスプリント競技をやる。オスロがやっているような、F1 のモナコグランプリのような。そのときは交通を遮断して都市の中心部から車がいなくなる。そういう中でスポーツを見たり、実際に楽しんだりする。そのようなことを体験することによって、例えば都市の中心部に車がないということを目の当たりにする。では、夏の間は、市電もあるし自転車というものもあるので、ライフスタイルとして車を使わずに、などということを考える問題提起のきっかけにオリンピック・パラリンピックがなって、「都市のど真ん中に車がなくてもいい」などということになったら、こういうオリンピック・パラリンピックを契機に議論が、交通インフラを考えようということにつながれば面白いのではないかと思っている。</p>
<p>豊島委員</p>	<p>1972 年との違いは何かということだが、僕はまだ生まれていなかったもので、今までお話を聞いたり 1 回目の会議の時の知識を踏まえてなのだが、ソフト主体ということが多く言われてきたが、1972 年はお話にあったように地下鉄などハードの力があつたと思う。だが、ハードパワー・ソフトパワーというところの議論を見ていくと、圧倒的なハードパワーの上にソフトパワーがあるということがよく言われる。ソフト主体で作上げたときに、基礎になるハードの部分がしっかりしていないとソフトパワーが着いて来ないということがハードパワー・ソフトパワーの話ではよく中心にされる。ソフト主体ということはもちろんだが、ハー</p>

<p>原田委員長</p>	<p>ドの部分はどういった形で、皆さんに納得していただけるようなハードの整理の仕方ということをしっかりやっていくべきではないか。</p> <p>新国立競技場の話で思ったことは、僕は建築を勉強しているので、コンペが開かれた時点では、いろいろな案が出てきて非常にワクワクした。その後のところでリセットがかかり、詳しくは分からないが、お金の問題とかがきたときに、皆さんが思っているような、建て替え・壊すことに対してネガティブなイメージを持っている人が多いと思うが、少なくともコンペの時点では僕は非常にワクワクしていた。また、こういった建物が出来ることによって活性化などが行われていくのだというところに未来を感じたし、その後の部分が今突っかかっている部分ではないかというところを考えると、あれを生かしてというか、それを踏まえた上で、皆さんの目に止まる部分では非常にワクワクするような案が必要だと思う。もちろん未来は分からないが、少なくとも希望が持てるようなパワーというものには確実に必要になってくると、ここまでの会議で思った。</p> <p>まだ議論を続けたいが、時間になったので私の方から一言まとめを申して終わりにしたい。</p> <p>この議論をまとめるのは至難の業で一言二言ではまとまらないのだが、この大会基本理念とコンセプトを作る場合、非常に重要なのが、1番目に対IOCということで世界のスポーツ関係者を納得させなければいけない。そういう意味ではウィンタースポーツを、世界的な不況というか縮小している中で、札幌がどういうことをやらなければいけないか。そういうアピールというのは非常に重要になるのではないかと思う。</p> <p>2番目はレガシーというのが非常に重要になる。今日話した「つながる」「獨創性」「まちづくり」というのは全て、また別の意味でつながっている。過去と未来、都市と自然がつながる。あるいはオリンピックとパラリンピックがつながる、札幌とアジア、そして世界がつながる。文化・教育とつながる。そういう「つながる」を作る獨創的なまちづくりというのが求められているのだろうと感じた。</p> <p>小林委員の話の中にもあったが、やはり人口減は止められない。これから都市を非常にコンパクトにしていく。コンパクトになると良いこともある。高速道路とか、そういうものより、むしろ歩いて移動できる、そういう新しい交通手段に注目が集まるので、そういった低炭素社会とかスマートシティ、あるいはクリエイティブな創造都市というのを作り上げていく。そういったことは日本だけでなくヨーロッパやアジアの都市においても大きな課題になっているので、一つの壮大な社会実験としてそういうことのできるプランを作っていければ良いのではないかと思う。</p> <p>非常にたくさんの意見を頂戴したので、私の拙いまとめでは全部を網羅できな</p>
--------------	---

	<p>かったが、今日はここで委員会を終わらせていただき、事務局のまとめに期待して更なるレベルの高い議論に結び付けていければ良いと考えている。</p>
(3) その他	
3 閉会	
原田委員長	<p>第2回委員会は以上で終了させていただく。</p> <p>第3回は10月19日(月曜日)の15時からの開催になる。</p> <p>次回に向け、事務局は第1回・第2回の委員会で出た各委員の意見を元に大会コンセプト案を作成し、第3回の委員会の前に各委員へ送付するようお願いする。</p> <p>各委員には、あらかじめその内容をご確認いただき、第3回で意見を頂戴し、最終的に本検討委員会としてのコンセプト案をまとめたいと思う。</p> <p>また前回と今回、各委員からパラリンピックやバリアフリーについて多くの意見が出たので、本日は欠席されているが、このテーマについてご専門の石橋委員にご意見を聞きながら、この議論を続けていきたいと考える。</p> <p>これをもって第2回の委員会を終了する。</p>

平成 27 年 (2015 年) 12 月 18 日
冬季五輪招致・スポーツ振興
調査特別委員会 (第 7 回)
時刻) 午 前 10 時
場所) 第一特別委員会会議室

本 日 の 案 件

- 1 冬季オリンピック・パラリンピック招致に係る報告について

作成部課	観光文化局スポーツ部
作成年月日	平成27年12月18日
提出理由	冬季五輪招致・スポーツ振興調査特別委員会における「冬季オリンピック・パラリンピック招致に係る報告について」の説明資料として

冬季五輪招致・スポーツ振興調査特別委員会 資料

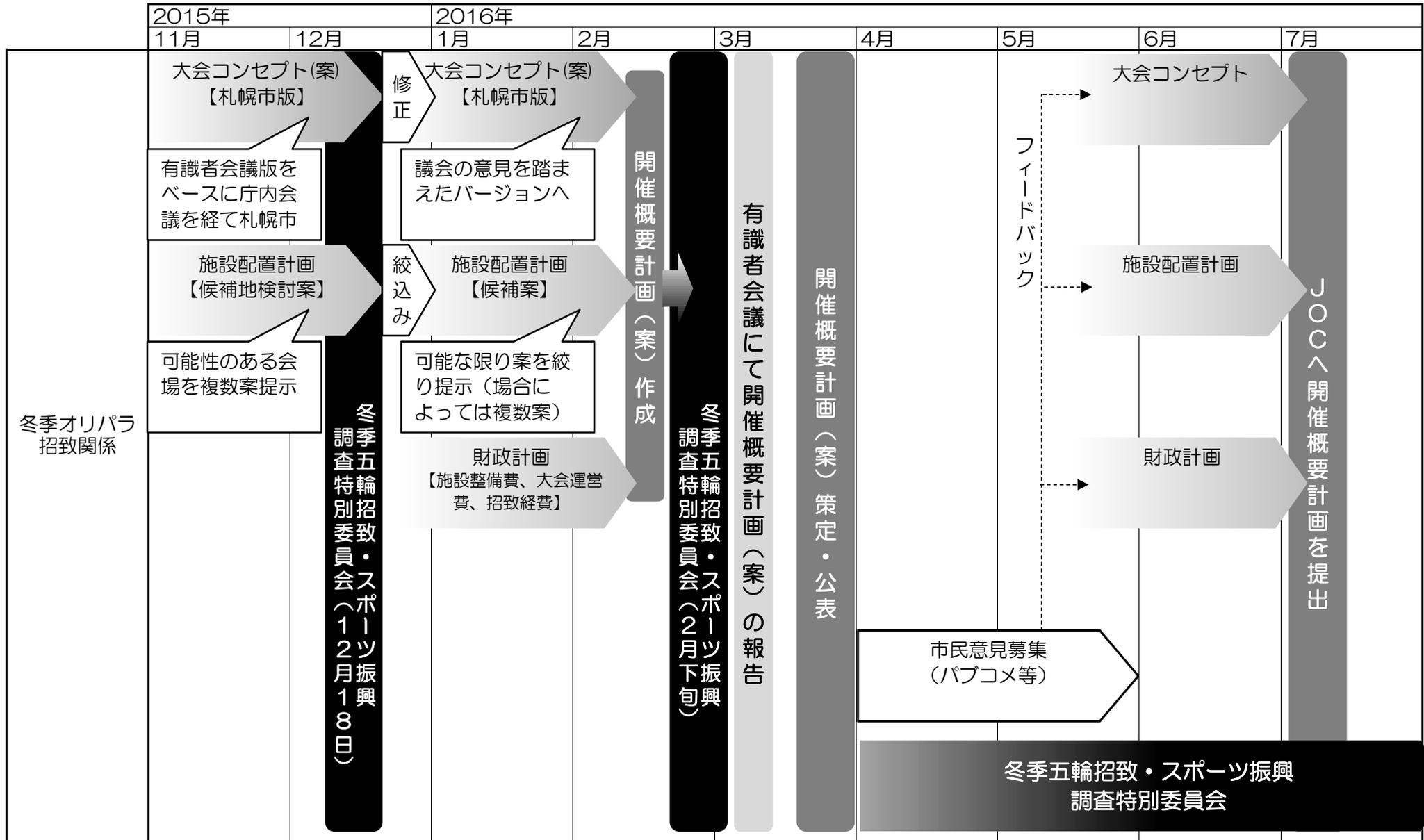
(平成27年12月18日)

【報告事項】

冬季オリンピック・パラリンピック招致に係る報告について

- 資料1 冬季オリンピック・パラリンピック開催概要計画策定ロードマップ
- 資料2 大会コンセプト案 概要版
- 資料3 冬季オリンピック・パラリンピック開催概要計画大会コンセプト案
- 資料4 冬季オリンピック・パラリンピック施設配置計画に係る候補地検討案

冬季オリンピック・パラリンピック開催概要計画策定ロードマップ



I. 招致の意義

1972年に札幌で冬季オリンピックが開催されて40年余り。

再び冬季オリンピック、そしてパラリンピックを開催することで、子どもたちに夢と希望を与えるとともに、冬季スポーツを振興し、世界平和に貢献します。

また、都市基盤・冬季スポーツ施設の更新や、バリアフリー化の促進といった都市のリニューアルを推し進め、成熟都市としての都市ブランドとシビックプライドを醸成し、札幌の街を新たなステージへと押し上げていきます。

II. 基本理念

札幌の強み

(1) レガシー

都市基盤・競技施設

ウィンタースポーツ文化

シビックプライド

(2) ウィンタースポーツ都市としてのポテンシャル

都市と自然

大会実績

北海道ブランド

課題

(1) 札幌を取り巻く課題

1972を知らない世代

冬季スポーツ実施率の低迷

施設の老朽化

人口減少・超高齢社会への対応

(2) 世界の趨勢

大会の大規模化・財政負担

地球環境問題

目指すべき方向性

(1) 大会の開催を契機としたまちづくり

まちづくり戦略ビジョンの推進

まちのリニューアル

雪と楽しむ文化

オリとパラの融合

ユニバーサル

(2) ウィンタースポーツ都市としての地位の確立

ウィンタースポーツの拠点

北海道の活性化

(3) 持続可能なオリンピック・パラリンピックモデルの提案

既存資源活用

大会後の有効利用

先駆的な環境モデル

札幌らしい持続可能な オリンピック・パラリンピック モデルの提案

- ・1972年で得たレガシー、札幌・北海道の豊かな自然と都市機能を活かします。
- ・雪を楽しむ北国らしいライフスタイルを次世代へ継承します。
- ・パラリンピックを契機に新たな時代に対応した、すべての人にやさしい豊かな暮らしを創出します。
- ・札幌・北海道の魅力とウィンタースポーツの力で世界から人々を惹き付けます。
- ・既存資源を活かし、次世代に過度な財政負担を残すことなく、環境にも配慮した持続可能な大会の実現を目指します。

III. 大会コンセプト

視点1：大会運営 ～スマートで独創的な大会運営モデル

1. アスリートファーストの視点で

→アスリートにとってベストな環境（競技・運営・宿泊・アクセス）、コンパクトな施設配置、選手の意見を反映、新たな競技種目の採用

2. 札幌ならではのおもてなしを

→ストレスフリーに過ごせるおもてなし、手作り感ある大会運営

3. パラリンピックのさらなる発展を

→オリパラ融合による共生社会の実現、障がい者スポーツの普及・発展に寄与、心のバリアフリー化

4. 持続可能性に配慮したオリンピック・パラリンピックを

→既存施設の活用、財政負担を低減、環境負荷の低減、後利用を考えた恒久施設と仮設施設の組合せ、夏冬問わず多目的に活用できる高稼働率の施設、選手村等の経済的かつ効率的な後利用

視点2：レガシー ～豊かな自然の中でウィンタースポーツ文化を形成

5. ウィンタースポーツを楽しむ文化を次世代へ

→1972年札幌オリンピックの記憶を未来へ継承、冬の豊かなライフスタイルの構築、世界平和を感じ発信できる環境づくり、子ども達や若者に1972年札幌オリンピックの歴史を紹介

6. 世界に誇るウィンタースポーツ都市「さっぽろ」へ

→アジアにおけるウィンタースポーツの拠点づくり、アスリートの育成環境の整備、国際大会の開催、ウィンタースポーツの魅力国内外に発信

視点3：まちづくり ～北の創造都市「さっぽろ」に向けて

7. オリンピック・パラリンピックを契機にまち全体のリニューアルを

→官民一体となって都市をリニューアル、民間投資の促進、交通ネットワークの充実

8. 先駆的なまちづくりのモデルを

→選手村の後利用をスポーツの研究・振興のための拠点として整備、歩いて暮らせる人と環境にやさしい先駆的なモデルづくり

IV. 開催にあたっての基本姿勢 ～「つくる」オリンピックから、「つながる」オリンピック・パラリンピックへ

過去—つながる—未来

1972年冬季オリンピックから繋いできたウィンタースポーツ都市としての環境・ライフスタイル・誇り・愛着を次世代の子どもたちに継承します。

都市—つながる—自然

都市と自然の身近さを活かし、ウィンタースポーツを通じて、高度な都市機能と豊かな自然が調和したまちを創っていきます。

オリンピック—つながる—パラリンピック

2度目のオリンピックと、初のパラリンピックの開催を契機に、まち全体をハード・ソフトの両面でバリアフリー化し、全ての人にやさしいまちを創ります。

スポーツ—つながる—文化・観光・教育

オリンピック・パラリンピックと様々な文化・観光イベント、教育をつなげることで、北の創造都市「さっぽろ」を創ります。

札幌—つながる—世界

選手を始め札幌への来訪者との交流や経済交流により、札幌が世界と結びつき、世界平和に貢献します。

V. 施設配置の基本的な考え方

- ①コンパクト …競技団体等と協議しながら、アスリートや来訪者の移動等に配慮した施設配置を提案します。
なお、地理的要因、持続可能性の観点から、大会後の利用や北海道の活性化にも配慮し、関係自治体と協議の上、一部競技の広域開催についても検討します。
- ②レガシー …1972年に得た資源を活かし、豊かなライフスタイルにつながる施設配置計画とします。
- ③持続可能性 …後利用計画を重視し、恒久施設と仮設施設の効率的な組合せや、施設の多目的化を考えていきます。
- ④民間資本活用 …施設の建設やリニューアル、運営面等において民間活力を取り入れていきます。
- ⑤環境への配慮 …都市と自然が融合した環境にやさしい大会を目指します。
- ⑥ユニバーサル …全ての人にやさしい施設整備を進めます。

冬季オリンピック・パラリンピック開催概要計画

大会コンセプト案

2015年12月18日（金）

札幌市

目次

I. 招致の意義

II. 基本理念

III. 大会コンセプト

IV. 開催にあたっての基本姿勢

V. 施設配置の基本的な考え方

I. 招致の意義

1972年に札幌で開催されたアジア初となる冬季オリンピックは、札幌のウインタースポーツシティとしてのプレゼンスを高め、国際化に大きく貢献するとともに、札幌の街を大きく変え、市民の誇りとアイデンティティの形成につながりました。

あれから40年余り。

再び冬季オリンピックを開催し、初のパラリンピックを開催することは、子どもたちに夢と希望を与え、冬季スポーツを振興し、世界平和に貢献するというオリンピック本来の意義に加え、都市基盤および冬季スポーツ施設の更新や、バリアフリー化の促進といった都市のリニューアルを推し進めるほか、札幌・北海道のみならず、日本全体の活性化につながるという効果が期待されます。

さらに、札幌が今後待ち受ける人口減少や少子高齢化の更なる進行への対応や、新たなエネルギー社会の構築といった幾多の困難を克服していく誇り高き市民力を育成し、札幌ひいては北海道の未来を切り拓いていくこととなります。冬季オリンピック・パラリンピックは、時代の転換期を乗り越え、札幌の未来を創り上げていくために、多くの市民が夢を共有し、大きな目標に向かって市民力を結集させるための、この上ない機会であると信じています。

招致から開催までの取組は、市民・企業・行政が一体となる、いわば「まちづくり運動」そのものであります。これを成し遂げることで、成熟都市としての都市ブランドとシビックプライドを醸成し、札幌の街を新たなステージへと押し上げることとなります。

スポーツの栄光、そして、平和の祭典でありますオリンピック。そして世界最高峰の障がい者スポーツ大会であるパラリンピックを札幌で開催したいと思えます。

II. 基本理念

基本理念を考えるにあたって、札幌の強みを活かし、課題を克服しながら、開催概要計画の目指すべき方向性を導き出します。

1. 札幌の強み

(1) レガシー

札幌は 1972 年のオリンピック冬季大会を契機として地下鉄や道路網などの都市の骨格をつくとともに、大会や練習会場として競技施設の整備や選手・役員・報道関係者などの関係者を受け入れるための施設が整備されました。

また、オリンピックを間近に観戦することで市民の中にウィンタースポーツに親しむ文化が定着するとともに、アジアで初めてのオリンピック冬季大会を市民が一丸となって成功させたことは、国際都市札幌として市民の誇りになっています。

(2) ウィンタースポーツ都市としてのポテンシャル

札幌は年間 6m を超える積雪がありながら 190 万人を越える人口を持つ都市と自然が共存する街であり、さっぽろ雪まつりなど雪を楽しむ文化が根付いているとともに、交通網などの社会インフラも充実し、国内外からのアクセス環境も整っています。

また、1972 年のオリンピック冬季大会開催後も、アジア初のノルディックスキー世界選手権大会やアジア冬季競技大会の開催などのウィンタースポーツの世界大会の数多くの開催実績があり、北海道の持つ食や自然環境など多くの観光客を引き付ける魅力もあるなど、これらを活かした、IOC が求める持続可能なオリンピック・パラリンピック大会の開催が可能な都市です。

2. 課題

(1) 札幌を取り巻く課題

大会後 43 年を経て、1972 年のオリンピックを知る世代も市民の半分以下となり、冬季スポーツの実施率も低迷している状況であり、1972 年に整備された競技施設や社会基盤整備のインフラも老朽化が進み、更新時期を向かえております。

また、北海道では、人口減少による経済活動への影響が懸念される中で、アジア等への市場開拓等の経済政策を進めているところですが、中心都市としての役割を果たす札幌においても集客産業による経済の活性化を図ることで、北海道全体の地方創生が求められています。

さらに、超高齢社会に対応した、すべての人にやさしい新たなまちづくりが求められています。

(2) 世界の趨勢

冬季オリンピック・パラリンピックについては、氷上競技施設等の財政負担により、開催可能な都市が限られることや、地球規模で深刻化する環境問題を受け、オリンピック・アジェンダ2020においては施設や自然などの既存資源を活かした財政的にも環境的にもやさしいオリンピック・パラリンピックモデルが求められています。

【オリンピック・アジェンダ2020のポイント】

評価にあたっては、持続可能性とレガシー（遺産）に重点が置かれている。

- ①持続可能性…既存施設の活用、仮設の活用等による財政負担の軽減や、環境への配慮が求められている。
- ②レガシー …競技施設などの有形財産、大会を開催することで得られる、スポーツ振興や地域活性化、市民の誇りといった無形財産としての遺産を未来へ継承していくことが求められている。

3. 目指すべき方向性

(1) 大会の開催を契機としたまちづくり

札幌市では、「まちづくり戦略ビジョン」を2013年に策定し、“北海道の未来を創造し、世界が憧れるまち”と“互いに手を携え、心豊かにつながる共生のまち”を「目指すべき都市像」を掲げ、まちづくりを進めています。オリンピック・パラリンピック大会招致をきっかけとして、まち全体をリニューアルし、雪を楽しむ文化・ライフスタイルを新たな価値として市民にさらには国内及び世界へ発信していくとともに、共生社会の実現を目指し、オリンピックとパラリンピックの融合を図ることで、超高齢社会に対応したユニバーサルなまちづくりを進めるなど、このビジョンを加速していきます。

(2) ウィンタースポーツ都市としての地位の確立

2018年平昌大会や2022年北京大会などの開催を通じて、今後、アジアにおけるウィンタースポーツは飛躍的に発展することが予想されます。札幌において、オリンピック・パラリンピック大会に向けたウィンタースポーツの拠点として環境を充実していくことで、アジア、そして世界に誇るウィンタースポーツ都市としての確固たる地位を築きます。

また、札幌市のみならず北海道全体の発展を常に意識し、道内の魅力資源と札幌の都市機能を融合させながら、北海道の魅力を更に高め、活力を与えることを目指します。

(3) 持続可能なオリンピック・パラリンピックモデルの提案

既存の施設や交通インフラなどを最大限活かしながら、ローコストな大会を心掛けるとともに、大会後も市民や国内、そして海外から多くのアスリートやゲストが集まる施設や受け入れの整備を進めます。

また、自然エネルギーを活用した、先駆的な環境モデルの実現を目指します。

これを踏まえ、以下のとおり基本理念を設定します。

基本理念

～札幌らしい持続可能なオリンピック・パラリンピックモデルの提案～

- 1972年で得たレガシー、札幌・北海道の豊かな自然と都市機能を活かします。
- 雪を楽しむ北国らしいライフスタイルを次世代へ継承します。
- パラリンピックを契機に新たな時代に対応した、すべての人にやさしい豊かな暮らしを創出します。
- 札幌・北海道の魅力とウィンタースポーツの力で世界から人々を惹き付けます。
- 既存資源を活かし、次世代に過度な財政負担を残すことなく、環境にも配慮した持続可能な大会の実現を目指します。

Ⅲ. 大会コンセプト

冬季オリンピック・パラリンピックは、それぞれわずか2週間程の行事ですが、オリンピック・パラリンピック後に何を遺すかということや、札幌市の目指すべき都市像としての「まちづくり戦略ビジョン」との整合をとることが重要です。

大会コンセプトの作成にあたっては、基本理念に基づき「どのような大会とするか」「オリンピック・パラリンピックの開催により何を遺すか」「開催を契機にまちがどのようにになっていくか」という3つの視点から、8つのコンセプトを設定します。

視点1：大会運営 …どのような大会とするか

視点2：レガシー …オリンピック・パラリンピックの開催により何を遺すか

視点3：まちづくり…開催を契機にまちがどのようにになっていくか

視点1：大会運営 ～スマートで独創的な大会運営モデル～

IOCより、オリンピックムーブメントが永続するような計画を求められていることから、過去の大会を振り返るだけでなく、未来の大会に向けての札幌ならではの独創的な提案が重要であると考えられます。

計画をつくるにあたり、競技種目や開催規模などの設定の仕方を含め、コストの削減やテロ対策など、スマートで安全安心な大会としていくことが重要であると考えます。

1. アスリートファーストの視点で

○優れた競技環境、国際大会の開催実績に基づく高い運営能力、万全な警備・危機管理体制、良質な宿泊環境、会場への快適なアクセスなどアスリートにとって最適な環境を提供します。

○選手の移動、地理的条件、持続可能性を考慮した可能な限りコンパクトな施設配置を目指します。

ex.) 選手村と競技会場の近接化、既存スキー場の有効活用、競技施設の継続利用

○計画段階で大会運営や施設計画に選手の意見を反映させます。

○次代を担う若者や子どもたちにも普及できる新たな競技種目を取り入れます。

2. 札幌ならではのおもてなしを

○良質で多機能な宿泊施設、快適な交通アクセス、北海道の豊かな食などを活かし、選手や役員、オリンピックファミリー、観客などの来訪者に滞在期間をストレスフリーに過ごせるおもてなしを提供します。

ex.) 様々なグレードのホテル、多言語対応、天然温泉、和の雰囲気、公共空間の完全禁煙化

○誰もが自然の雪と氷を楽しめる創造的な文化・芸術イベントを創り上げるとともに、地域住民のボランティア等、市民参加の手作り感ある大会運営により、来訪者をおもてなしします。

ex.) さっぽろ雪まつり、ホワイトイルミネーション、PMF、国際芸術祭などと連携、創造的イベント、ホームステイ、学生実行委員会など若手ボランティアの育成

3. パラリンピックのさらなる発展を

○オリンピックとパラリンピックの融合により、互いに手を携え、誰もが活躍できる共生社会への実現へつなげていきます。

ex.) 同時期開催の提案など

○障がい者スポーツの大会を積極的に開催し、パラリンピック、パラリンピアンへのプレゼンスを向上させるとともに、障がい者スポーツの普及・発展に寄与することで、バリアフリー社会を構築していきます。

ex.) スペシャルオリンピックスの誘致、障がいの有無を問わないインクルーシブな大会の開催、高齢者・障がい者等も対象となる研究・トレーニングセンターの機能整備など

○パラリンピックの大会を契機に、競技会場や会場へのアクセスにおけるユニバーサル化を進めます。

ex.) 計画段階からの国際基準に合ったバリアフリー化の検討、区体育館のバリアフリー化

○パラリンピックを契機に、パラリンピック教育を推進するなど、ノーマライゼーションの理念を広め、心のバリアフリー化を進めます。

ex.) バリアフリー教育

4. 持続可能性に配慮したオリンピック・パラリンピックを

○既存の夏季施設など、既存資源の活用を前提に財政負担を低減するとともに、競技施設への再生可能エネルギーの導入や公共交通を軸とした輸送計画による環境負荷の低減など、持続可能性に配慮した大会を提案します。

ex.) 札幌ドーム、つどーむ、きたえーるなどの活用、老朽化した施設の改修による活用
競技施設の太陽光パネルの導入、次世代自動車による輸送計画など

○ランニングコスト縮減に配慮し、後利用を考えた恒久施設と仮設施設を組み合わせるなど、無駄のない施設計画をつくります。

ex.) 老朽化した競技施設の更新、既存施設での観客等の仮設、仮設施設の再利用

○新設または建替えにより整備する競技施設については、大会後に夏冬問わず多目的に活用できる稼働率の高い施設とする後利用計画をつくります。

ex.) 冬はスケート場、夏は他の競技・展示場・イベントホールとしての利用など

○選手村やメディアセンターなどの非競技施設については、更新時期にある既存の同種用途施設の再整備と連動させることや、用途変更なども想定した民間施設の借上方式を導入し、経済的かつ効率的な後利用を前提とした計画を提案します。

ex.) 選手村としての新設民間マンションの借り上げ、メディアセンターとしての新設商業施設の借り上げ、公共施設の統廃合による整備など。

視点2：レガシー ～豊かな自然の中でウィンタースポーツ文化を形成～

札幌には、1972年冬季オリンピックにより整備された施設や、オリンピックを開催したことにより育まれた市民のまちに対する誇りや愛着心が、有形無形の財産として残っています。

しかし、今、1972年冬季オリンピックを知る世代の減少、ウィンタースポーツ実施率の低迷、当時整備された施設の老朽化など、歴史を継承する上での課題があります。

次世代に歴史を継承していくために、これらの財産をどのように活用していくかという視点が重要であると考えます。

5. ウィンタースポーツを楽しむ文化を次世代へ

○1972年札幌オリンピック時に建設された数ある施設については、リニューアルの際に1972年札幌オリンピックの記憶を未来へと継承していきます。

ex.) オリンピックの歴史をメモリアル化

○札幌の恵まれた雪質、身近にウィンタースポーツを楽しめる環境を活かし、子ども達のウィンタースポーツの体験機会の充実など、冬の豊かなライフスタイルを構築し日常生活の延長上にオリンピック・パラリンピックがあるという文化を創出します。

ex.) 公園で気軽にウィンタースポーツができる環境づくり、ウィンタースポーツ塾、学校におけるスキー・スケートの授業や部活動などの充実

○オリンピック・パラリンピックを通じて、国籍、年齢、性別、文化の違い、障がいの有無に関わらず、全ての人々がオリンピック精神である世界平和を感じ発信できる環境づくりを目指します。

ex.) 先住民族への理解促進、伝統文化の啓発

○子ども達や若者をはじめ、多くの市民や来訪者に 1972 年札幌オリンピックの輝かしい歴史を紹介し、オリンピック・パラリンピックの価値を後世に伝えていきます。

ex.) ウインタースポーツミュージアムのリニューアル、オリンピックミュージアムネットワークへの加入、小中学校におけるオリパラを題材とした授業の実施

6. 世界に誇るウィンタースポーツ都市「さっぽろ」へ

○オリンピック・パラリンピックを契機に、札幌・北海道を舞台として、アジアにおけるウィンタースポーツの国際競技力の向上のための拠点づくりを進めます。

ex.) ナショナルトレーニングセンターの指定、合宿施設など

○子どもへの教育指導者の育成、ウィンタースポーツの通年利用が可能な施設の整備や、民間企業の支援により、アスリートの育成環境を整えていきます。

ex.) 夏場の練習環境整備、選手の雇用、スポンサー、セカンドキャリア

○オリンピック・パラリンピックの開催を契機に、大会前そして大会後も数々の国際大会を開催し、ウィンタースポーツの牽引役としての地位を高めていきます。

ex.) スポーツコミッションの設立

○道内自治体と連携し、ウィンタースポーツの魅力を国内外に発信し、ウィンタースポーツツーリズムにより、北海道を活性化させます。

ex.) スキーを題材とした情報発信ツール（映画、ドラマ、マンガ、ゲーム）

視点3：まちづくり ～北の創造都市「さっぽろ」に向けて～

札幌は、1972年冬季オリンピックでつくられたまちです。

再びオリンピックを開催することに加え、初めてのパラリンピックの開催を通じて、1972年前後に整備された都市基盤の更新や、先駆的なまちづくりモデルの提案を行うことで、すべての人にやさしい冬の豊かなライフスタイルを創出することができると考えます。

さらに、札幌市の目指すべき都市像としてのシナリオである「まちづくり戦略ビジョン」と呼応しながら、オリンピック・パラリンピックの誘致により、札幌を新たなステージへ導けるようなまちづくりが重要であると考えます。

7. オリンピック・パラリンピックを契機にまち全体をリニューアル

○オリンピック・パラリンピックを契機に、1972年に建設された競技施設や、社会基盤など、官民一体となって都市をリニューアルするなど、共創のまちづくりにより、北海道の活性化、地方創生の起爆剤としての効果を創出します。

ex.) 真駒内駅前地区のまちづくりの推進など、ロンドンレガシー開発公社のような官民連携組織の検討など

○オリンピック・パラリンピックを契機に、ホテルのグレードアップや民間ビルの建替えを支援し、再開発などの手法を活用しながら、民間投資を促し、まちのリニューアルを進めます。

ex.) ホテルの機能向上支援、民間再開発の促進、PPPの導入など

○オリンピック・パラリンピックを契機に交通ネットワークの充実など、世界からアクセスしやすく誰もが快適に移動できる都市を目指します。

ex.) 航空、鉄道、地下鉄、バスなどの公共交通ネットワークの充実、ノンステップバス・ユニバーサルタクシーの導入促進、冬のバリアフリー・アクセス性向上

8. 先駆的なまちづくりのモデルを

○選手村については、選手の円滑な移動に配慮し、開閉会式会場である札幌ドームと近接させて整備します。また、札幌ドーム周辺にスポーツ科学・医学・情報研究の推進機関や市民利用も含めたスポーツ振興のための機能を整備することで、新たなスポーツ拠点を形成します。

- 選手村は、地域内のエネルギーマネジメントの仕組みやユニバーサルデザインを取り入れ、後利用として歩いて暮らせる人と環境にやさしい先駆的なモデルを構築します。
- ex.) 水素エネルギーや再生可能エネルギーの導入、スマートウェルネス拠点整備事業の活用など

IV. 開催にあたっての基本姿勢

～「つくる」オリンピックから「つながる」オリンピック・パラリンピックへ～

1972年冬季オリンピック大会は、インフラや施設整備を行うなど、国際都市さっぽろを「つくる」オリンピックでした。

成熟都市として2度目のオリンピック、そしてパラリンピックを目指す札幌は、基本理念と8つのコンセプトを基に、「つながる」オリンピック・パラリンピックを目指します。

1972年の大会で得たものを活かしつつも、過去と未来がつながる大会とすることや、既存の都市機能と豊かな自然環境を活かして都市と自然がつながる大会とすること等、今後のオリンピック・パラリンピックの新たなモデルとして世界へ提唱していきます。

過去—つながる—未来

1972年冬季オリンピックから繋いできたウィンタースポーツ都市としての環境・ライフスタイル・誇り・愛着を次世代の子どもたちに継承します。

都市—つながる—自然

都市と自然の身近さを活かし、ウィンタースポーツを通じて、高度な都市機能と豊かな自然が調和したまちを創っていきます。

オリンピック—つながる—パラリンピック

2度目のオリンピックと、初のパラリンピックの開催を契機に、まち全体をハード・ソフトの両面でバリアフリー化し、全ての人にやさしいまちを創ります。

スポーツ—つながる—文化・観光・教育

オリンピック・パラリンピックと様々な文化・観光イベント、教育をつなげることで、北の創造都市「さっぽろ」を創ります。

札幌—つながる—世界

選手を始め札幌への来訪者との交流や経済交流により、札幌が世界と結びつき、世界平和に貢献します。

V. 施設配置の基本的な考え方

これらの基本理念やコンセプト等を踏まえながら、以下の6つのキーワードを基に施設配置計画を検討します。

コンパクト

競技団体等と協議しながら、アスリートや来訪者の移動等に配慮した施設配置を提案します。

なお、地理的要因、持続可能性の観点から、大会後の利用や北海道の活性化にも配慮し、関係自治体と協議の上、一部競技の広域開催についても検討します。

レガシー

1972年に得た資源を活かし、豊かなライフスタイルにつながる施設配置計画とします。

持続可能性

後利用計画を重視し、恒久施設と仮設施設の効率的な組合せや、施設の多目的化を考えていきます。

民間資本活用

施設の新築やリニューアル、運営面等において民間活力を取り入れていきます。

環境への配慮

都市と自然が融合した環境にやさしい大会を目指します。

ユニバーサル

全ての人にやさしい施設整備を進めます。

冬季オリンピック・パラリンピック施設配置計画に係る候補地検討案

注) 札幌市としての検討案であり、施設・用地の利用にあたっては、今後、関係権利者との協議を要するものである。

種別	競技	種目	基準(一部)	候補地1			候補地2			候補地3			
				場所	後利用	選定理由・課題	場所	後利用	選定理由・課題	場所	後利用	選定理由・課題	
競技施設	スキー スノーボード	アルペン	標高800~1,100m	ニセコ★	継続	最も標高差がとれるため ※降雪量が多い	富良野★	継続	標高差がとれるため ※札幌と距離が離れている				
		フリースタイル	パラレル	全長400~700m	札幌国際 テイネ ばんけい	継続	既存コースを活用できる	藻岩山 Fu's	継続	既存コースを活用できる ※大会運営上、駐車場のスペース等に課題がある			
			クロス	全長650~1,200m									
			スロープ	全長1,000m程度									
			モーグル	全長200~270m									
			ハーフパイプ	全長120~150m									
		エアリアル	助走25° 距離64m以上										
		クロスカントリー	固定3,000席 立見10,000席	白旗山★	継続	既存利用が検討できるため							
	ジャンプ(ラージ)	固定3,000席 立見1~1.5万席	大倉山	継続	既存利用が検討できるため								
	ジャンプ(ノーマル)	固定3,000席 立見1~1.5万席	宮の森	継続	※会場が2箇所に分断される	大倉山(新設)	継続	※大規模改修が必要					
	ノルディック複合	クロカン・ジャンプに同じ	円山競技場	一部現行に戻す	大会運営の効率を高めるため	白旗山	継続	※ジャンプ場から遠い					
	ボブスレー スケルトン リュージュ	固定1,000席 立見10,000席 1,000m以上	市内スキー場 (遊休地活用)	継続	既存スキー場等を活用し、大会後の市民利用が図れる。 ※コース敷地の確保								
	バイアスロン	固定5~7千席 立見1~1.5万席	西岡★	継続	既存利用が検討できるため								
スケート	スピード	6,000席 リンク120m×72m	真駒内屋外 (建替)	夏:イベント会場、 冬:スピード、フィギュア、ショート	用地が広く場所としてのレガシーを活用できるため	札幌ドーム周辺	夏:イベント会場、 冬:スピード、フィギュア、ショート	札幌ドームとの機能連携による相乗効果が期待できるため	帯広 (明治北海道十勝オーバル)	継続	既存リンクの活用が可能 ※札幌と距離が離れている		
	フィギュア ショートトラック	12,000席 リンク60m×30m	真駒内屋内 (建替)	体育館 イベント会場	用地が広く場所としてのレガシーを活用できるため								
アイスホッケー	アイスホッケー-1 (男子)	10,000席 リンク60m×30m	つどーむ (仮設)★	現行に戻す	既存利用が検討できるため	札幌ドーム周辺★	夏:イベント会場、 冬:アイスホッケー	札幌ドームとの機能連携による相乗効果が期待できるため					
	アイスホッケー-2 (女子)	6,000席 リンク60m×30m	月寒体育館 (建替)★	アイスホッケー ※通年	修繕時期に合わせて建替ができるため								
カーリング		3,000席 リンク60m×30m	きたえーる (仮設)★	現行に戻す	既存利用が検討できるため	月寒体育館 (建替)★	アイスホッケー ※通年	修繕時期に合わせて建替ができるため					
非競技施設	選手村・ メディアセンター・ メディア村	[選手村] 土地13.4万㎡ 建物12.3万㎡ 4,500人規模 [メディアセンター] 土地16.8万㎡ 建物9.5万㎡ [メディア村] 1,000人規模~	札幌ドーム周辺★	スポーツパーク 宿泊施設、住宅等 展示・商業機能	札幌ドームと一体的なスポーツ集客機能の向上が図られるため								
	開閉会式	40,000人	札幌ドーム★	現行に戻す	IOC基準(4万人収容)を満たす唯一の施設であるため								

★印のある会場はパラリンピックにおいても使用する会場(アルペン、クロスカントリー、バイアスロン、アイススレッジホッケー、車椅子カーリング、非競技施設)